
ある意味チートな少年

アザトク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある意味チートな少年

【Nコード】

N3801Q

【作者名】

アザトク

【あらすじ】

神様の悪ふざけで転生することになった少年、彼は魔法が使えないが己の拳で明日を切り裂いていく・・・ってお話です。この作品は無印編をザックリ切り捨ててプロローグに使っています、A・Sからが本編です。

プロローグ1（前書き）

主人公はチートだよ／／／

プロローグ1

「はあ、誰だあんたは？」

「吾輩か？　ワシは剛腕の錬金術師である！」

「近いから離れて」

気が付いたら真っ白な空間に居た、そして目の前にムキムキのオッサンがいた。

「で、その錬金術師様が何の用だ？」

「うむ、貴殿は光栄なことに神の選定に選ばれた」

「は？」

「あれは年末の忘年会のことじゃった、我らが主である主神様が『誰かを転生させちゃお』とか言い出して、偶然下界に指さした先に居たのがお主じゃった」

「つまりはあれか？　俺ってばなんか誰かチビツ子をトラックから守ったりとかそんな死に方じゃなくて偶然死んじまったのか？」

「理解がよろしいようであるな」

「死にやがれ！」

俺はとりあえず思い切りオッサンを殴つとく

「むぐう、この吾輩に拳でダメージを与えるか。気に入った、小僧には我が司る“剛腕”の加護を与えようとするか」

「剛腕？」

「つまりはあれじゃ、身体能力が天上天下無双となる」

「！？」

な、なんてこった、やばくねそれ？

「じゃが別に目とかは良くならん、強いて言えば筋肉じゃ」

「ほうほう」

「ムキムキではないが小僧は間違いなく全世界全種族で一番の怪力となろう」

「おお神よ！　なんてあなたは素晴らしいんだ！！」

あれだよね、これってある意味で男の夢の一つだよな？

範馬○次郎だってこんな感じなんでしょ？

やったね俺！

「ところで転生先なのじゃが……残念なことに吾輩は知らされておらん」

「ふえ？」

「じゃがもしもどんな困難が待ち受けていようともお主の拳ならばすべてを砕けるはずじゃ！」

「え？ いや、ちょっと待ちやがれ——」

そこまで行って地面に急に穴が開き俺は下に落ちる………と思いきや上に吸い上げられた。

落とし穴じゃないのかよ！

かくして俺は新たな世界に落とされ…もとい吸い上げられた。

プロローグ1（後書き）

よし、どんな意見でも来い！！

第一話（前書き）

グダグダですみません

第一話

あの駄神に転生させられてから約七年、俺は耐えきった。

だって一応は俺って転生前は高校一年生だったんだぜ？

そんなやつがいきなり赤ちゃんプレイだなんて…グハツ！ 駄目だ
想像したら俺は死ぬ、主に心が

まあ話は戻して俺こと神楽坂かぐらざか 神威かむいは小学校の上级生のグループと
喧嘩していた。

向こうは格下らしく武器を持って三十人ぐらいの人数で襲ってきて
いるがこの程度で俺を倒せると思っている方が驚きだ。

「舐めんな！ お前らなんぞに負けはせんわ！！」

「うるせえ、ほざいてろ！」

「大人しく死にやがれ！」

事の発端はこいつらが原因だ。

理由、俺がム力ついたから。

子供の世界は冷酷だ、目をつけられればこんな風にされるんだから。

でも俺は怪力無双である。

本気で殴ったりしたら相手の体が文字通り“消し飛ぶ”

だから俺は筋肉操作とでも言おうか？ それを1%を切るようにしている。

ちなみに1%出すとボディ一発で曙ぐらいの体重の人が浮く

だから現状でも成人男性の腕力並みはあるはずだ。

防御力もそれぐらい。

「覚悟せいや！」

「しまった…痛う」

つい考え事をしていたから突然の奇襲に反応しきれなかった。

頭部に鉄バットの一撃を食らいちよこつと俺はム力ついた。

「死ね」

だからアッパーを食らわせたんだ

ついカッとなってやった。今も反省してない。

それから五分後、俺は全員倒したので家に戻ることにした。

「ああ！ ムー君また喧嘩したんだね！！」

家に入る直前で俺はそんな声を聞いた。

声の主はわかっている。

振り返るとそこには幼馴染の高町なのはが居た。

俺は「おう」と返事しようとしたがその隣になのはの友達の月村とバニングスがいたのでやめた。

学校では不良扱いの俺、なのはは昔からの付き合いなので気にしてないらしいがそんなやつに気軽に友達が話しかけるなんて驚くだろう。

現に月村とバニングスが「話しかけたら危険だよ」とか言ってるし。

俺はそのまま無視して家に入る。

ちっ、ちよいと眠いぜ。

なのはside

「むう、ムー君め…逃げたな」

またムー君が喧嘩をしてきた。

上級生たちがムー君のこと気に入らないとか噂があったからそれかな？

昔からムー君は喧嘩が強くて、自分は望んでないのに喧嘩ばかりを

吹っ掛けられていたしな。

「ちよつと、なのは！ あんた神楽坂なんか話しかけて殺されても知らないわよ！」

「そ、そうだよ。危険なんだよあの人は」

ううん、わかってないの二人は

ムー君はいつも冷たそうだけど実は優しいの、なんだっけかなお母さんがムー君のこと『つんでれ』とか言ってたよ！

「大丈夫だよ、ムー君は恐い人じゃないもん」

「ああもう！ そんなわけないじゃないの！」

ムー君あんな性格だから誤解されちゃってるの

なんとかならないのかな？

s i d e o u t

俺は目を覚ます。

時刻は17時30分

少し長く眠っていたらしいな。

「外に出るか」

俺は家を出る。

この家には俺以外の人間はいない。

両親は…いや、いつかこれは話すでしょう。

街を歩く、別に喧嘩などをしたいわけじゃない。

なんか暇な時とかはこうしてぶらりとするのが習慣なのだ。

珍しく今日は業者用倉庫が沢山ある場所まで歩いてきた。

なにもないし帰るか

そう思った時だった。

「ちょっと離してよ！」

「お家に帰らせてください！」

どこか聞き覚えのある声が聴こえてきた。

これって確かあの二人だよな…

隣のクラスで俺は嫌われているが一応はなのはの友達だ。

「じゃあねえ、助けるか」

「助けんなくていくら呼んでも来ないんだよ！」

ありゃ？ いつの間にか話が進展してる？

しかもなのはも居るじゃん。

「はあ、なんかややこしいことになってんな」

「誰だ！？」

俺の呟きに倉庫に居た全員が振り向く

「なぐに、ちよいと通りすがった幼馴染さ」

そう言い終わると同時に一番近くの男の顔面に膝蹴りを入れて気絶させる。

その気絶した男を盾に走りまた一人気絶させ、要らなくなった方は手裏剣として使う。

「す、すごい………」

三人のうち誰が口に出したかはわからないがきつとそれは三人が心に思っていることだろう。

「な、なんなんだよお前は」

黒服の男と黒幕っぽい男が震えながら俺を見る。

「だからお前が襲おうとしたこいつの幼馴染だつてば」

無表情に黒幕の顔面を踏みつけて黒服はマウントをとり顔面を何回も何回も何回も殴り続ける。

「や、やめてムー君！ 私達は無事だから！！」

「……………なのはに感謝しな」

つて聞こえてないか。

俺は携帯で警察に連絡を入れる。

二十分もしたら何台もパトカーがやってきて事情聴取された。

月村とバニングスは家の人に向かいに来てくれて無事に帰った。

「ほら、なのは。足挫いてんだろ？」

「えー？ ううん、そんなことは――」

「心配すんな、もう暴れたりはしないよ」

そう告げるとなのは俺の背中に乗ってくる。

「……ありがとね」

「ん、気まぐれだ」

そのあと、俺らは終始無言で帰って行ったのである。

第一話（後書き）

頑張るネ

第二話（前書き）

何も言わないで

「これで決める！ 偽・デイベインバスタアアアアアアアアア（
ダッシュからの普通の右パンチ）！！」

本家とは少し…てか普通の右パンチだがね。

俺の拳は見事に猫の眉間に当たり破裂した。

死骸は光となり消え、代わりにジュエルシードが残された。

「どうする、俺封印なんて出来ねえぞ」

とりあえず『変な気配静まれ』って念を送ってみる。

するとジュエルシードが光って一瞬前まで宝石から感じていた変な
気配が消えた。

成功か？ そんなことよりもなのは達が来る前に逃げよう。

俺は急いでその場を後にした。

なのはside

ユーノ君の言う通り、現場に向かって着いたら丁度あの子も居たの。

「ジュエルシードを渡して」

「え？ 貴方が回収したんじゃないの？」

「？ どういうこと？」

なんかお互いに知らないみたい。

「…知らないなら別に良い」

「あ、待って！」

ああ、行っちゃった。

ちゃんとお話したかったのに。

「ユーノ君、本当にここから気配を感じたの？」

「うん、間違いないよ」

うーん、なにがあっただろう？

s i d e o u t

俺は悩んでいた。

このジュエルシードをフェイトに渡すかを

いつそのことプレシア殴り飛ばすか？

いやいや、それだとなにも解決しない。

むしろ悪化する可能性が高い。

かといって渡してもなんにもならないし……

どうすれば良いんだよ！

俺は考える…説得でもしてみるか？

いやこうなったらあれするか

『神様、神様、ムキムキでハンサムで男前すぎる神様』

『呼んだであるか？』

おおう、本気で出やがった。

『あのさ、死者蘇生とかできる？』

『…なにをするつもりであるか？』

俺はプレシアのことを話してみた。

『ふむ、結論から言えば死者蘇生は不可能ではない』

『本当か！？』

『うむ、その薬を貴殿にくれてやろう。生成するのに日数を貰うがな』

『別に構わない、しかしやったねこれで万事解決じゃな』『しかし、それを使うのであれば覚悟をしる』…なんだよ？』

『その薬には色々と問題があつてな、副作用ではないんじゃないが――』

俺はそれを聞いてショックを受けた。

マジかよ、かあゝ！ そりゃないぜ大将

『しかし本来ならば死者蘇生とは等価交換が出来ぬ代物じゃ』

曰く、錬金術や魔法は全て等価交換の法則で出来ているらしい。

強力な魔法ならばその分だけ大量の魔力を消費しなければならないように人の命を復活させるにも代価は必要

『小僧、その命の価値と釣り合うものはなんじゃと思つ』

『……そいつの命だけだ』

『正解じゃ』

つまり例え世界で一番価値のない命に世界で一番価値のある命を差し出そうとも蘇生は失敗に及ぶ

そこで今回使用する薬は“死”の因果をも捻じ曲げる代物

その代償はデカすぎる。

『まあ、その時が来るまでに考えとくさ。頼んだよ生成の方』

『任された』

ったく、面倒くさい役割だなこれって。

俺はあの後から傍観に徹していた。

そして一週間が経ったある日、フェイトとなのはが等々正面から戦うことになった。

はあ、なにやってんだよ、なのは。

押され気味のなのは、やはり戦闘経験からフェイトには一歩劣るか。

助けに行こうかとも考えたがやめた。

ありゃお互い本気の顔だ。

一対一の戦いに割り込むなんてことはできない。

でもこれってあれでしょ？ 前哨戦的な感じなんでしょ？

だって戦場でまだアルフ見てないし、まだ一回目の衝突だし……てことはもう一回か二回あるのか。

面倒臭いな。

俺は旅人が着るようなマントを着て顔を隠す。

あいつら、下でまだジュエルシードが生きてるでしょうが。

ビルの屋上から約一キロ先までライダーキックをかましてみる。

「GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！」

木の化け物が突然の衝撃に驚いている。

「あ、あなただれ！？」

「く、新手か！？」

なのはとフェイトが俺にリンカーズコアを構えてきた。

「お初にお目にかかる御嬢さん方。いや、これは失敬でしたな、どうぞ続きをジュエルシードは私が回収しておきますので」

まだ封印していないジュエルシードを二人に見せる。

「寄越せえ！」

横からアルフが飛びかかってきたがスウェーで躲して俺はこの場の全員に背を向ける。

「ではさらば！」

結構マジな跳躍で一気に二キロは跳ぶ

やべえよ、まだ7か8%しか出したか出さないかでこんなに跳べるなんて…うわ100%想像したくねえ！！

流石のあいつらも着いてこれないのか振り切れた。

着地すると素早く封印して街に戻り、家に帰る。

ふう疲れた。

俺は眠ろうとしたがなぜか眠れず、起きてテレビでも見ることにした。

第二話（後書き）

もう少し内容を詰めるか？

第三話（前書き）

三話
W
W
W

第三話

ピンポン

その日は深夜に鳴った家のインターホンから始まった。

「はい、こんな時間にどちら様って、ワブッ」

扉を開けたらなのはが泣きじゃくった顔で俺に抱きついてきた。

「……とりあえず中入れ」

「……………（コクリ）」

言われたままに従うのは

ココアを作ってやるがその間も俺に抱きついて離さない

「ほれ、飲めよ。寒くはないだろうがなにか甘いもんでも飲んで活力回復しやがれ」

「……………（コクリ）」

ソファに座り、テレビは消してやる。

ココアを一気に飲み終えたのは俺の膝を枕にしてすぐに寝てしまった。

「……なにがあったんだ？」

少なくとも昨日、学校ではいつも通りだった。

俺の膝で寝てしまっているなのは髪を撫でながらココアを飲み考
える。

昔からこいつは嫌なこと、辛いこと、悲しいこと、悔しいことがあ
ればこうして俺に抱きついてきた。

最近は少なくなったものの…このわずか数時間でなにがあった？

とりあえずこの状態のなのは様々なものに対して心を閉ざしてい
る。

家族にすら心を閉ざし、俺から離れようとはしない。

朝になったらむこうに連絡して恭也さんにでも事情を聴くか。

いや…もしかしたら知らないかもな。

ならばなのは状態を説明して学校を休むと伝えてもらうか。

このなのは出来る限り人には見せたくないしな。

「……………」

・・・・・・・・・・」

無言で俺に抱きついて顔をうずくめられている。

別になのはだし構わないが…うむ、どうしたものか？

今回は特に重傷だ。

電話での連絡もなのはに邪魔された。

さつき桃子さんと土郎さんが直接来てくれたからというもの

こいつがこの状態の時はなるべく俺以外の人間と関わりたくないらしい。

それも声を聴くだけでも嫌なんだってさ。

両親が来ても見向きもしないし、むしろ俺で姿を隠しながらギリギリと俺の腰に回す腕の力が強くなった。

なんだってんだよ？ 本当に大丈夫か？

なのはの頭を撫でてやるとより深く顔をうずめてきた。

涙や鼻水とかでビチョビチョです、助けて

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

はい、良いんです。なんにも言いませんよ。

聞かれたくないことっぽいし、聞いてもいいことならばあとで自分から言うだろうし。

とにかく言葉じゃなくて行動でこいつを慰めてやらねばなんだ。

基本的に俺はなににもできないのでなのはの動きに合わせてやる。

起きて腹が減ったら食わせてやるし、寝たいなら寝させてやる、泣きたいんなら胸を貸してやる。

後、なのはの頭を撫でる。

下手したら一日中とかもしなければならない。

本気で怒ったあととかもそうしてるしな。

じゃなきゃいつまでも機嫌が悪い。

うゝむ、しかしどうしたものか……

「……………ムー君」

「んだよ?」

「ありがとね」

「…………だから気まぐれだって言ってるだろうが」

はあ、なんで俺は素直に喋れないかね?

お礼言われてめっちゃ嬉しいのにな。

「飯は食うか？」

「……………うん」

遅めの朝食むしろ昼食を食べ始める。

その間もなのはに元気はない。

「……………ねえムー君」

「おう、どうした」

「ムー君はもしも大人になって自分の娘が死んじやったらどうする？」

「そりゃ悲しいだろうな」

「……………じゃあもしも、もしもだよ？ その娘を生き返らせることができるとしたら？」

なるほどな…なのはもうアリシアのことを知っちゃまったのか。

てことは管理局の連中もなのはに接触したのか。

「……………もしも生き返らせることができたなら？ はっ！ 愚問だな」

なのはが俺の言葉に顔を挙げて見てくる。

「そんなのは駄目だ、いいか？ 一度死んじまった奴はもう生き返らねえ、命が蘇ったとしてもそいつは元のそいつじゃねえ。ただの一死霊 ゾンビ だよ」

「ムー君…」

でもそのゾンビを作ろうとしてるんだけどな俺は

「なのは、聞いてくれ。お前が何に悩んでるかは知らんがこれだけは覚えていてくれ」

そつだ、俺はこれを伝えなきゃいけない。

「仮に誰が最愛の人間が、家族が、親友が、仲間が死んだとしても絶対に生き返らせちゃ駄目だ。自分が死ぬのも駄目。最後の最後まで必死に精一杯生きる」

例え、どんなに苦しくても

例え、どんなに辛くても

例え、どんなに悔しくても

例え、どんなに悲しくても

例え、どんなに醜くても

残された人間は生に縋りつかなきゃいけない

「じゃなきゃ死んでいった人間に対して失礼だ」

俺の話を聞いてなのはの瞳に若干の光が宿った。

「うん、私やってみるよ」

「おう、精々やれるところまでやってみろ」

「ありがとね」

「……だから気まぐれだって」

なにが気まぐれさ？ 自分で何言ってるんだか？

話は俺が知らないうちに相当進んでる、このまま終わらせるなんて駄目だ。

まだ管理局とプレシアの勢力が回収してないジュエルシードは四つ、うち二つは俺が持ってる。

くくく、まだまだプレシア編は終わらねえぜ？

第三話（後書き）

このまま魔王√で行くか？

なんか色々と感想お待ちしております。

第四話（前書き）

俺なら作れるこの先の話も！！

第四話

なんとかなのはを落ち着かせた日の夜、俺はジュエルシードを回収するためにやってきた。

「ち、先客がいたか」

しかし着いてみるとフェイトとアルフがいた。

「貴方は」

「ガルルルル！」

武器を構えて戦闘態勢に入られる、面倒くさい。

「そんな威嚇すんじゃない、見たところ互いに誘い出されたみたいだし俺は帰らせてもらっぞ」

どうやら今回は管理局の連中がワザと持っていたジュエルシードの封印を解いて俺らを誘き寄せたものっぽい。

「互いにここは退いた方が良いと思うが？」

「・・・そうはいかない」

「覚悟しろ！」

どうやら俺の提案は気にいらなかったらしく襲い掛かってきた。

フェイトは中距離から

アルフは近距離から

実に連携のとれた戦闘だ。

使い魔であるアルフが猛攻を仕掛け、不意をついてフェイトの中へ遠距離からの援護射撃

実に面倒くさい。

「犬っころ、歯を食いしばれ」

「え？」

3%の力で俺はアルフにショートアッパーを決める。

決まったと思いきや反撃で脇腹に蹴りを貰ってしまった…だが

「ぐあっ!？」

馬鹿め、俺の筋肉に魔力で碌に強化もしていないその程度の蹴りでダメージは与えられんよ。

逆にアルフの脚にダメージがあるはずだ。

俺はアルフの服を掴んでフェイトの方に放り投げる。

「アルフ!」

慌てて受け止めるフェイト

「お、お前、本当に人間か!？」

アルフが驚愕の表情で俺を見てくる。

「それはお前の自慢の鼻でもわかるだろう？ れっきとした人間だよ」

「嘘をつけ！ 魔力も感じられない人間が蹴った私の脚の方が痛くなるなんてありえない！」

「くくく、ならば覚えておけ。世界はな『ありえない』なんてことは“ありえない”『んだよ』」

なんか俺ってこのまま行くと悪役ポジションになりそうな気がしてならない。

「そこまでだ！ 全員大人しく武装を解除して投降しろ！」

ちっ、管理局か

「残念だったな犬っころにテストロッサ、勝負はお預けだ」

俺はそう言って退く

ここで管理局に捕まるわけにはいかない。

原作とは若干とは言え違う流れなんだ、もしも俺がここで捕まってしまったことで更に大きな流れの変化が起きるのは不本意でならな

い。

「まったく、良い天気だなコンチクショウ」

翌日、俺は学校をサボってぶらぶらと散歩をしていた。

なんとなくだけど今日は学校に行きたくなかったのだ。

片手には肉まんの大量に入った紙袋、もう片手にはスーパーの袋

俺が目指した先は街外れにある公園

「ニャー、ニャー」

「おう、元気そうだなによりだ」

最近見つけた二匹の捨て猫

灰色の縞模様の猫と茶色の縞模様の猫だ。

二匹とも両方の瞳の色が違うオッドアイ

最初は見捨てるつもりだったがなんとなく、気まぐれで助けてしまった。

「ほら、俺が買ってきてやったんだから味わって飲みやがれ」

「ニャー」「ニャー」

ぺろぺろと舐めだす二匹

その必死に味わう二匹の姿に和んでいると後ろからバサツと紙袋が落ちた音がした。

「ん？」

振り返ってみるとそこにはフェイトと犬っころがいた。

「ガルルルル！」

あゝ、威嚇されちゃってるよ。

「どうしたのアルフ？」

「フェイト、こいつ昨日の男だよ」

「え？」

犬っころの言葉を理解したフェイトは臨戦態勢に

「ストップだ、こいつらが怯えてるだろうが」

俺は子猫たちの姿を見せると警戒はされてるものの戦闘に入る意志は消えたようだ。

「ニャー！ ニャー！」

「ニヤニヤニヤ！」

食事を終えた二匹が俺に撫でられながらゴロゴロと気持ちよさそうに鳴いている。

「随分と懷かれてるんだな」

「不本意ながらな」

「そう言っても顔が嬉しそうだけど？」

「……煩せえ」

犬っころめ、余計なんだよ。

フェイトとアルフは俺を挟むようにベンチに座り肉まんを一緒に食べている。

「（チラリチラリ）」

さっきからフェイトがチラチラと俺と子猫を交互に見ている。

気になってしょうがない。

「あゝ、二匹撫でるのは疲れる。テストロッサ、お前二匹撫でてろ」

「え？ い、良いんですか？」

「もともと俺は撫でる気なんてないんだ、さっさとこいつ受け取れ」

少しばかり強引に俺はフェイトに茶縹のほうを渡す。

「私もやってみてもいいか!？」

「耳元でうるせえ、渡してやるから黙れ」

もう一匹はアルフに渡してやる

なんか犬が猫を撫でるってシニールだな。いや、アルフは狼だっけか？ 余計シニールだ。

「お前、実は良い奴だな」

「・・・気まぐれだって」

「素直じゃないんですね」

むぐぐ、なんか誤解を与えてるようだぞお？

しかしまあ、こんな時間を過ごすのも悪くはないかねえ。

個人的にはフェイト好きな部類だし？

俺ってばこんなにも口悪くて柄が悪いし、嫌われ者のはずなんだがな。

「ん…どうやら来たみたいだな」

「「え?」「」

「「にや?」「」

俺は立ちあがり拳を構える。

「あら? 気づかれるなんて中々やるじゃない?」

「全員跳べ!」

その言葉に即座に反応した二人は子猫を抱えて横に跳ぶ

瞬間、今さっきまで座っていたベンチに雷が落ちた。

「随分と手荒い挨拶じゃないか大魔導師」

「気に入ったかしら剛腕?」

結界が張られ、目の前にプレシア・テストロッサが現れた。

「へえ、俺のこと知ってるのかよ」

「ええ、あなたじゃないけども剛腕を持つ者は二人目よ」

過去にも居たってことか、この歴戦の大魔導師は戦ったことでもあるのか?

「と言っても、彼はちよつとあなたとは違ったわね。あなたの方が随分と危険そう」

「お褒めに預かり至極光栄、なんの用だ?」

「わかってるのに聞くのね…良いわ単刀直入に言う。ジュエルシードを渡しなさい」

「嫌だね！」

俺は地面スレスレを飛行するかの如く跳躍して駆ける。

「シッ！」

途中で拾った枝や石をさながら弓矢のように飛ばしていく。

が、当然ながらにバリアで防がれる。

「それ普通の木の枝や石よね？ 結構衝撃あるんだけど」

「なにそれ怖いんですけど」

だって普通に投げてるだけだよ？

俺は飛来する雷を避け続ける。

「ふはは！ この魔法、とても重病人だとは思えないな！！」

「なんで知ってるのか気になるけども…とりあえずは今日は退散した方が良さそうね」

何言ってるまだ早いぞ？ 本気でこれって挨拶変わりだったのか。

なら俺も逃げるか、管理局には見つかりたくない。

「なんとか間一髪だったか？」

あの場所から少し離れた場所まで逃げる、ここまでくればバレル確率は低いだろう。

「そうね、もう少しいたら確実に管理局が来てた」

「危なかったな」

・・・あれ？

なんでこの二人ついて来てるの？

「それはあなたに聞きたいことがあったから」

「心読むんじゃねえ」

つたく、不思議なやつだ。

「母さんが重病人ってどういうこと？」

「む、それは――」

話しても良いのか？

でもこれを知ったらこいつはどんな行動に出る？

間違いなくプレシアに問い詰めることだろう。

そしたらフェイトを嫌っているプレシアがでる行動は？

ここで教えるのは楽だ、でも教える役目は俺じゃない。

「テストロッサ、それは俺にもプレシアにも聞いちゃいけない」

「え？ なんて――」

「それはお前がプレシアの口から“直接”聞くことだ、そうじゃないきゃお前と母親の間の亀裂は完全に治ったことにはならない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイトは黙ってしまった。

「なにを考えてるか知らんが一人で抱え込むな、その犬っころとも相談してみろや。親友なら頼りになるはずだぜ？」

「前々から言おうとしていたが私は犬じゃなくて狼だ」

「…ま、悩んで悩んで悩んだ結果に起こした行動で出た結果がお前にとつての答えだ。精々葛藤して自分のやれるところまでやってみろ」

俺はそれだけ言って歩き始める

「悩み続けるか…ありがとう」

「・・・だから気まぐれだって、気にすんな」

「私の名前はフェイト・テストロッサ、あなたの名前は？」

「神楽坂神威、別に覚える必要もない。呼ぶなら神威って呼べ」

「よし神威、次会ったら絶対にブッ飛ばしてやるから覚悟してろよ！」

「もう少し強くなってから言え、犬っころ」

俺は「犬じゃなくて狼！！」という言葉に背に受けながら歩き出す。

プレシア・テストロッサ、絶対に一度思い切り殴ってやる。

第四話（後書き）

無印編、下手したらずぐ終わっちゃうかも・・・orz

第5話（前書き）

もつすぐ無印編もおわりだなあ

第5話

最後のジュエルシードは二日前に管理局に持ってかれてる。

俺は公園のベンチで考えていた。

なのははアリシアのことを知っていた。

だがプロジェクトFのことは知らないようだった。

そしてこれも最後のジュエルシードの時に確認したことがフェイトは既に管理局側に付いてしまっている。

俺のことは話していないようだがいつバレるかもわからぬ。

なのでこの二日間家には帰っていない。

時の箱庭に突入はしていないようだ。

恐らくだがプレシアがなんらかの処置を施して転移などを邪魔しているのかそれとも世界の原作に対する抑止力か。

後者の方の可能性は低いだろう。

なぜなら俺というイレギュラーが今の今まで存在できたのだから。

ならば原因はプレシアの方にある。

次元転送にすら干渉するとは流石は歴戦の大魔導師と言ったところ

か。

いつも通り公園で猫達に餌を与え終わりベンチに座りながら俺は空を仰ぎ見る。

「……決着つけにいくか」

短く呟き、ポケットを探ると宝石を取り出す。

俺が所持するうちの二つのうちの一つ、願いを叶えと言われている宝石

「くくく、こんなものに頼るなんて俺もまだまだだな」

でもこれがないや俺はきつとあの場所へはいけない。

『もしもし神様?』

『なに用であるか?』

『いや、この前頼んだ薬って出来た?』

『うむ、どんな病をも治すことが出来る上に死者蘇生まで出来るチートな薬である』

神様の口調、若干前と変わってないかなと思いつつも俺は尋ねる。

『それって何個ある?』

『む? 一個である、あれほどの物は複数も作れん』

『…そうかじゃあ悪いけど早速くれないか？』

『よかるう』

パアと周りが光って目の前に小さい箱に入った錠剤が現れた。

これで準備は完了だ。

俺はいつも戦う時に着ているあのマントを纏う。

一度、大きく深呼吸をして心を落ち着かせる。

「おい、ジュエルシード。お前人の願いを叶えるんだってな？ んなら俺の願いも叶えやがれ」

ピカッと俺の言葉に答えるようにジュエルシードが光って少年の姿を包み込んだ。

光が収まるとそこには誰もおらず、その日はどこまでも青い晴天だった。

俺が転移してくると早速お出迎えがあった。

ガラガラガラ

耳障りな音を立てながら近寄ってくるのは傀儡兵

ドゴンドゴン

地を揺らしながら進んでくるはゴーレム

つい嫌気がしちまう。

これ全部相手にすんのか

「プレシア・テストロッタ、その首洗って待ったときやがれ」

俺は10%の力を発揮し邁進するのであった。

アースラ side

アースラではプレシアの下に行くために強行部隊が編成され技術者達が必死に次元の歪みの調整と正確な座標確認を行ってた。

大魔導師プレシアの魔法によって次元に歪みが起き、プレシアはフエイトが知っている座標には居なくなってしまうていたのだ。

「ムー君、やっぱり帰ってきてませんでした」

なのはとユーノはフエイト達から神威の話を聞いて二日前から家に何度も訪れていたのだ。

しかし神威は帰ってきておらず、行方不明だった。

「そつか…仕方ないわね」

アースラの艦長であるリンディは溜息交じりにそう呟いた。

「彼は危険だ、あのプレシア・テストロッサとも対等に戦える“魔法”の腕は侮れない」

「ええ、魔力隠蔽も完璧ですし。もしも敵に回ったら厄介なことこの上ない」

クロノとユーノは神威に対しての怒りを覚えていた。

『なぜ、あれほどの力を持っていて僕らに協力しない』のかと

身勝手ではあるが本人達からすると怒りに値する話であつた。

どちらの勢力にも付かずには済まない相手

しかもジュエルシードを二つも奪取されている。

純粹に自分の力不足もあつたのだがそれすらも本人達は神威に向けていた。

「確かに彼がどれほどの“魔力”の持ち主であるかは知らないけどあのSランク魔導師とも闘える“魔導師”である彼の協力は欲しかったわね」

その言葉に全員が頷く

ただ勘違いしているのは神威は魔力素質が一切ない“ただの力が強い少年”だと思っていないこと。

「座標確認、発見しました！」

ずっと黙々と座標を探索していたエイミィのその言葉に全員の顔に緊張が走る

「モニターに映します！」

スクリーンに管理曲局の小型偵察から流れてくる映像が映し出され、フェイトを除いたブリッジに居る全員がそれを見つめる。

本来、生命が活動不可能な地域（主に毒ガスが充満している火山や管理世界など）で使われる小型偵察機

今回は次元の歪みを超えられるのがこの偵察機しかなかったのだ。

小型偵察機が最奥の部屋へと突入と同時に映し出された部屋の奥の光景に、全員が息を呑んだ。

「え！？」

「……ッ！」

驚いて声を出したなのはに釣られて顔を上げたフェイトも、喉の奥で声を殺す。

部屋の一番奥に鎮座された大きなカプセルの前で、プレシアがこちらに背を向けて立っていた。

だが、それは問題ではなかった。

問題なのは何らかの液体に満たされて薄く光るカプセルの中。

膝を抱える様にして浮かんでいる一人の少女の容貌だったのだ。

多少幼く見えるがそれは、どう見ても、フェイト・テストロッサのものだった。

『私のアリシアに、近寄らないで』

冷たく告げたプレシアが、偵察機の一機を雷で弾き飛ばす。

プレシアの意地の悪い顔を見つめながら、フェイトは何が起こっているのか必死に考えていた。

狂気に満ちた女性の哄笑が、薄暗い部屋に反響していく。

そんな中

小型偵察機を気にするでもなく、プレシアは再び振り返った。

一糸まとわぬ少女の浮かぶカプセルの表面を愛おしげに撫でながら、

『もう駄目ね。時間がないわ。たった7個のジュエルシードでは、アルハザードへ辿り着けるか解らないけど仕方がないわ』

柔らかな光を湛えた瞳を憎しみの色に染め、アースラに送られている映像を睨み付けた。

向こうの声がこちらに伝わるように、こちらからの声も当然向こうに伝わっている。

『でも、もう良いわ。終わりにするの。この子を亡くしてから
の暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも』

アースラに居る人間達はプレシアの姿になにも言葉が出なかった。

決してプレシアのことを理解できない訳でもない。

むしろ、ここまで来たらプレシアの言葉の意味は嫌でも理解出来て
しまう。

『聞いていて？ 貴女の事よ、フェイト』

愛情が一片も感じられない酷薄な声が、プレシアの口から告いでる。

それを聞いた、フェイトはビクツと体を揺らした。

言いようの無い恐怖がその身を奔る。

『せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だ
け。役立たずでちつとも使えない、私のお人形』

フェイトは、心がどこまでも冷えていくのが解るのに、それを外に
表す術を知らず、ただ立ち尽くす。

そして、ここに来てようやく、これまでの母の態度の意味を理解し
ていた。

記憶に残る母は、いつも微笑っていた。

それに応える自分も、幸せそうに微笑えていた。

なのに、母から与えられるのは、冷たい憎しみと静かな拒絶。

それなのに、記憶の中の微笑みに縛られて、それを追い求め続けていたのだ。

絶対に手に入らない宝物を、壊れた人形のように、ただひたすら。

プレシアの述懐を聞くエイミィとクロノの表情にも苦いものが走る。いつかは伝えなければならなかった事だが、ショックを和らげるための方策を取ってからになるはずだった。

こんな最悪の形で本人に伝わる事になるとは、思ってもいなかった。だが、こうなった以上は仕方がない。

本局から送られて来たデータを全て頭に入れているエイミィが、今回の発端の話を始める。

中央を追われたて、事故でプレシアが娘を亡くしてしまっていた事。その後、彼女が人造生命、つまりは死者蘇生の研究に携わっていた事。

そして、その研究の名前がフェイト——Project F・A・T・E・である事。

音声が双方向になっているため、プレシアにもその説明は聞こえて

いた。

カプセルの表面に指を這わせながら、熱に浮かされた様に話し出す。

『良く調べたわね？　そうよ、その通り。だけど駄目ね。ちっとも上手く行かなかった。造り物の命は、所詮造り物。失ったものの代わりにはならないわ』

フェイトに対する徹底的な拒絶の言葉。

画面の向こうにいるのは、一人の女性は最愛の娘を失くし、絶望に走ってしまった一人の親だ。

プレシアの身勝手極まりない主張は続く。

『アリシアは、もっと優しく微笑ってくれたわ』

大魔導師はまるで熱に浮かされたように語っていく。

『アリシアは、時々我侭も言ったけど、私の言う事をとてもなく聞いてくれた』

フェイトはなにも考えられずにいた。

『アリシアは、いつでも私に優しくかった』

アリシアの顔の辺りをカプセルの上から撫でるその様子は、フェイトに向けるような憎悪の感情は一切無く、慈愛に溢れていた。

『フェイト、やっぱり貴女は、アリシアの偽者よ。せっかくあげた

アリシアの記憶も、貴女じゃ駄目だった』

「やめて……やめてよ!」

少女の叫びは届かない。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形。だから貴女はもう要らないわ。どこへなりと消えなさい!』

「お願い! もうやめて!」

心優しい少女の願いでさえも、狂気に支配されている大魔導師へと届かない。

ブリッジが不気味な静寂に包まれる。その場にいる誰も言葉を発する事が出来なかった。

まるで、画面の向こうに居る大魔導師の狂気に当てられた様に。

『————良い事を教えてあげるわ、フェイト。貴女を作り出してからずっとね。私は貴女が————大嫌いだったのよ!』

最愛の母から送られた、最悪の言葉。

その瞬間、フェイトの膝が、まるで糸の切れた操り人形の様に、力無く床に付く。

フェイトの瞳からはハイライトが消えてしまっていた。

「フェイトちゃん!」

「フェイト！」

なのはとアルフの声も、フェイトには届かない。

この歳で最愛の母からのこの言葉は堪えすぎた。

もう立ち直れない、誰もがそう思った。

しかし

『おいおい、そりゃあ人の親としてどうよ？』

画面の向こう側から聞こえる一人の少年の声

全員が、フェイトでさえ驚愕し画面に顔を向けた。

『・・・まさかここに来れるとは驚きだわ』

『はっ！ その割には冷静じゃねえの』

まさか

なのははそう思った

いや、アースラ中の人間がそう思ったのに違いない。

『まあ、色々と言いたいことはあるけども？ とりあえずはお前の腐ったその心を叩きなおしてやるぜ』

『良いでしょう！ アルハザードへと向かう道、華麗に花を咲かせてあげるわ！！ 神楽坂神威！』

そこには“剛腕”の少年が居た。

s
i
d
e

o
u
t

第5話（後書き）

感想お待ちしております

第六話（前書き）

相変わらず駄文です

第六話

三人称 side

「はあっ！」

俺は速攻でプレシアへと肉薄し拳を叩きこむ

「ちっ、ただのパンチで私の障壁を貫くなんてやっぱりあなた凄い
わね」

「お褒めに預かりどうも！」

時の箱庭

そこで俺とプレシアは闘っていた。

驚いたことに100%の力で全力で殴ればプレシアのバリアは突破で
きた。

自分の攻撃は通用することが証明はされたが空に逃げられれば不味
いことになる

跳躍でその気になれば何処までも跳べる気がするが所詮はただの
跳躍

空中で急な方向転換はできない。

故に空を縦横無尽に動かれたらそれを捕らえるのは至難の技

たがしかしプレシアは飛ばない

“剛腕”のことを知っているのならば空中に飛ぶことの優位性は理解しているだろう。

前に合ったという剛腕は多少なりは魔力があつたみたいだが俺に魔力が一切ないことは既に見抜いていないわけがない。

プレシアがクロノみたいな青二才ならやり易いんだがな。

挑発には乗らず、戦闘時には常に冷静

巧みな魔法技術で敵を翻弄する

原作よりも厄介だ

もっとドガンと大技で攻めてくると思いきや小技系ばかり。

肉弾戦に持ち込みたいが近寄ってもすぐに離れられる。

純粹に場数が違う

俺は圧倒的に経験値が少ないのだ

敵に離れられた時や飛ばれた時の対処法を考え付かないのが良い例だ

今回も近づきは離れられ、近づきは離れられで結局一回も攻撃が当

たっていない。

「……………」

飛来するプレシアの雷の魔法を避けるために走りながら俺は考える

一撃、そう一撃入れれば良いのだ。

その一撃が遠い

「ち、面倒くせえ」

side out

フエイトside

「ふえー！　なんでムー君があそこにいるの!？」

なのはが驚いて叫んだ。

正直私も驚いてる、管理局の人達でもまだ行けないのに彼は一人で乗り込んだのだから。

「彼はいつたい何者なんですか？」

そう思ったのはきつと私だけじゃないはず。

この中で一番彼を知っているはずなのはでさえこの狼狽っぷり。

「なのは落ち着いて！」

「にゃ〜！」

ああ、駄目だ。

本格的に壊れてきている。

「なのは、深呼吸して」

「スーハー、スーハー、スーハー…うん、少しは落ち着いたの」

良かった、落ち着いてくれた。

「えっと、落ち着いたのは良いけど彼に質問してくれないかしら？」

「そ、そうだった！」　ムー君！！」

『んあ、なんだ？』

画面の向こうでお母さんを睨みながら返事をしてくる神威さん。

「今度はなんでそんなところにいるの！-！」

『…別に、この女がムカついたからだ』

「ムカついた？」

私は思わず呟いていた。

彼はなににムカついてるの？ お母さんに？ なんて？

『私としては貴方にムカつかれる理由がないと思うんだけど』

そうだ、彼はお母さんに会ったのなんてこれが二回目のはず。

なのになんであんなに怒ってるの？

「まさか…ムー君、フェイトちゃんを助けるために？」

『違いえよ、単なる気まぐれだよ』

気まぐれ…気まぐれでそこまで行って戦っているの？

「神楽坂神威君でしたか？ 貴方はどうやってそこに行ったのですか？」

リンディさんが尋ねる、でも神威さんはこちらを見ずに言った。

『自分で考えやがれ、管理局』

相変わらず口が悪い、でも優しい人だってことは分かってる。

この前、公園で会った時に猫に餌を与えていた彼の顔

とても優しく、とても寂しげな顔だった。

なんだろう、彼のことを思うと熱くなってきた。

あの時の顔も中々だけど、今こうして戦っている彼の顔も凛々しく

て格好良い。

「フェイト、どうしたの？」

「っ！ なんでもないよ！」

アルフが私の顔を覗き込んできていた。

考え事に夢中で気づかなかった。

そんな私を見ながらなのはが

「うゝ…もしかしてフェイトちゃんまでなの？」と唸っていたがどうしたのだろうか？

『そついやアンタに聞きたいことがあったんだ』

画面から彼の声が聞こえる。

そして戦いは終盤へと向かっていくのだった。

s i d e o u t

第六話（後書き）

結構詰め過ぎた、無印編は正直駄目かな？

第七話（前書き）

無印完結まであと少し

第七話

なのはside

前から思っていたけどもムー君はやっぱり凄いの。

喧嘩ばかりで人付き合いも悪いし、周りの人は誤解してるけど実はすごく優しいの。

前だって、家族や友達には言えなかったけどフェイトちゃんの事を知って私は泣きそうだったの。

でも周りに心配も掛けなくなかったし泣けなかった、そしたら急にムー君に会いたくなつて家に行ったの。

玄関から出てきたムー君を見たら急に涙を堪えられなくなって、それで／＼

ムー君は私の憧れなの

いつもいつも誰かの為に行動して、お礼を言ったりすると『気まぐれ』と言つて誤魔化すムー君

今回もきつとそう

フェイトちゃんのことを知ったからこうしてあそこでフェイトちゃんのお母さんと闘ってる。

でもやっぱり『気まぐれ』で来たらしいの。

『気まぐれ』ってなんでムー君がこういう時に使ってるか意味が解らないけどとにかく『気まぐれ』らしいの。

『気まぐれ』であそこに行つて、『気まぐれ』でフェイトちゃんのお母さんに怒つて、『気まぐれ』で全部を救おうとしている。

…気まぐれすぎるの。

やっぱりムー君らしいな。

そんなムー君だから私は懂れているの。

ちらりとフェイトちゃんを見てみるとムー君をジッと見て頬を赤くしている。

ま、まさか、フェイトちゃんも

これは後でムー君とO・H・A・N・A・S・Iしなきゃなの。

「皆さん！ 次元の歪み修正完了しました！！」

「わかったわ！ みんな行つてちょうだい！」

『はい！』

今すぐに行くから待っててなのムー君

side out

プレシア side

私は目の前の不思議な男と闘っている。

本当に不思議な男だ。

あの人形と変わらない年齢なのに私に説教しにきたのだ。

しかも理由が『気まぐれ』らしい。

意味がわからない。

「そりゃあ！」

「ちっ、なんなのよただの瓦礫がなんで私の障壁にヒビ入れるの！？」

というか、本来ならば障壁ってヒビとか入らないはずなんだけども？

規格外だ。

“剛腕”を持つ人間は必ずどこかがおかしい。

以前に戦ったあの“剛腕”の女もそうだ。

魔力がEランクぐらいしかないのに私は…いえ、私たちは苦戦を強いられた。

Sランクの人間が三人がかりですよ？

思い出すだけで戦慄が走る。

まだ私が管理局に居た時、私達より前に交戦したことのある私達の先輩方も同じようなことを言っていた。

その時の“剛腕”も女だったらしく捕まえるのではなく殺すしか手はなかった。

もちろん私の時もそう。

“剛腕”は私達からすると厄災の種だ。

力に溺れ、必ずなにか問題を起こす。

「考えごとたあ、余裕じゃねえか!!」

鋭く、疾い蹴り

咄嗟に避ける、障壁の展開も間に合わなかった。

ギリギリで避けた為にその一撃の恐ろしさが余計にわかってしまった。

例えるなら砲撃魔法の嵐

冷や汗が滝のように流れ出る。

慌てて飛び退いて私は魔法で応戦する。

「くっ、なんであなたはあんな人形の為にここまでやるのよ!」

そうだ、なんであんな人形の為に

「まだ分らないのかよ...、お前はあいつの産みの親だろ?」

「違うわ、あれは人形。決して私の娘ではないの!」

私の娘はアリシアだけ、あんな人形なんて娘なんかでは

「本当にそう思ってたのか?」

「っ!」

男のその言葉に私の攻撃の手は止まってしまった。

何故だろうか、この男の言葉が私の胸に刺さった。

「本気でお前はそんなこと思ってたのか?」

「.....当たり前よ」

自分でもわかる、力弱い言葉だった。

わかってるわよ、あの娘を産んだのは私

アリシアの代わりに作ったクローンであろうともあの娘は人形なんかではない。

でもね、それを認めちゃったら

「そしたら私は、なにに縋って生きて行けばいいのよ――

っ！」

特大の魔方阵が出現し私は男を吹き飛ばそうとした。

――しかし――

「簡単なことだ、今に縋って生きて行けばいい」

気が付いたら懐に入られていて、その拳を振りかぶっていた。

「ちつとばかり痛えが我慢しろよ、俺の拳はかなり効くぜ？」

そしてその拳は私の顔面を捉えて私は吹き飛ばされた。

身体に力が入らない

顔が凄く痛いわ、痛い。

でも威力はそんなになかった、と言っても成人男性ぐらいの威力だけだ。

・・・今に縋って生きれば良い、か。

仰向けになって天井を見上げながら考える。

思い返すと私は過去に縛られ続けて来た。

アリシアを失ってから絶望し、こんなことまでしてしまった。

フェイトを作り、アリシアの記憶を埋め込ませて私は出来そこないと、人形と、フェイトを蔑んだ。

虐待もした。

ジュエルシードの集まりが悪いからという理由で本当はただの八つ当たりにしすぎなかった。

これじゃあ、死んだアリシアに顔向けできないわね。

「聞くぞ、プレシア・テストロッサ」

「・・・何よ？」

そう言う男は懷に手を入れて錠剤の薬を出す。

「これは世界に一つだけの特效薬だ、それこそ死者を蘇らすだけのな」

「え…？」

「これは比喻ではない、本気で死者をも蘇らせることのできる薬だ」

私はそれを聞いた瞬間にこの男がなんでそんな薬をもっているかよりもアリシアを蘇らせることができるかもしれないという希望が芽生えた。

「しかしこの薬で死者を蘇らせるには副作用がある、それは――

「それは？」

男はなにかを決心したようにこちらを見て

「それは――
使用対象を蘇らせたい
と望んだ者の死だ」

…そういうことね

つまりは私が“今”を生きてアリシアを蘇らせるか、私が死んでアリシアが“今”を生きるか。

ははは、なによこの選択

普通ならここで悩むでしょうが私の心は決まっているわ。

「なら、蘇らせなくて良いわよ」

男の顔が驚いている。

「確かに私はアリシアを蘇らせたいわ、でもね私が死んだらそれは意味がない。それなら私は生きて“フェイト”へ犯した罪を償うために生きるわ」

本当、なんでかしら？

今だって私はアリシアを蘇らせたいのは事実

でもそれ以上に私は生きなくちゃいけないっていう方が強い

「…良いんだな？」

「ええ、後悔はしてないわ」

むしろ清々しいわ。

「ならばお前がこれを飲め」

薬を私は受け取られる。

「お前は不治の病だろう？　これを飲めば治る」

「でもこのく「安心しろ、死者を蘇らせるのでなければ副作用はない」そう」

私は薬を飲みこむ。

するとまるでつきものが落ちたかのように体が軽くなった。

「ではな、そろそろお客も来るようだし俺は舞台から降ろさせてもらう」

「そう、なら私が送ってあげるわよ。今回のお礼の意味もこめてね」

「別に礼なんて気にするな、俺はただ気まぐれでやってきたことだ。お前の為でもフェイト・テストロツサの為でもない」

気まぐれでここまでやるのは人としてどうかとも思っけど…まあ良いわ。

「さようなら、ありがとうね」

「だから、礼は――」

言い終わる前に私は転送した。

ふふふ、怒ったかしら？

私は寝起きみたいに伸びをして心を切り替える。

「うーん、よし！」

さてと…私はあの娘と話でもしますか。

s i d e o u t

第七話（後書き）

今更ですが地震での被害など大丈夫ですか？

エピソード1（前書き）

一日三話投稿WWW

エピソード1

プレシアの一件での俺の役目が終わってはや一週間、俺は喧嘩をしていた。

「糞が！」

「この数に勝てると思ってんのかよ!!」

「死に晒せやああ!!」

俺を囲む連中は素手だったり、鉄パイプだったり、スタンガンだったり、ナイフだったりと多種多様な物を持って俺に襲い掛かってくる。

数にして大体50人ぐらいか？

プレシア戦では結構力を出して戦って居たが流石は大魔導師

あの雷は地味に効いた。

多少それで傷を負っているがこの程度の相手だったら問題はないだろう。

俺はいつもの如く戦い終える。

この程度の数で勝てると思ってたのかよ三下どもが。

今日はこのまま帰ってと言いたところだが今日は別に寄って行き

たいところがある。

図書館だ。

本の返却日昨日でさ、返さないとなんだよね。

俺は歩きながら考える。

原作で俺の出来ることは終わった。

転生前の知識として俺は原作のリリカルなのは知っていた。

しかしそれは無印まで。

二期からは見てないんだよね。

だから登場キャラもストーリーも知らない。

誰がどういった役柄で、主要キャラがどんな顔なのかも。

はあ、こんなことならちゃんと見てればよかったな。

そうそう、テストロッサ達だが裁判を受けることになったらしい。

フェイト・テストロッサとアルフはやらされていたということで罪が軽くなり

プレシア・テストロッサはその持っている技術を管理局に提供するという司法取引で罪を無くすという形で落ち着きそうらしい。

アリシアの遺体はこの街に埋めたようだ。

それはテストロッサ家の意志らしく、“家族”でこの街に住むのだし墓参りにはいつでも行けた方が良くという理由だとか。

管理局から俺にスカウトがあつたが俺に魔力がないことを教えると引き下がってくれた。

無論、その時に一悶着あつたが。

向こうさんは俺のことを勝手にSランク以上の“魔導師”だと勘違いしていたらしく特にクロノが驚いていたっけ。

本を返却し、なにか面白そうな本を探していると車椅子に座っている少女を見つけた。

それはいつか見たように届かない本に必死に手を伸ばしている。

しょうがねえな。

俺は歩み寄り、少女が取ろうとしていた本を取ってやった。

「お前は、脚が悪いのになんで他人を頼らん？」

「その声はもしやのムー兄か？」

この兄と呼ぶ少女、名前を八神はやてという。

俺の大切な

義妹だ

エピソード1（後書き）

無印編完結！！

次回より本編・A・S編始まります。

プロローグ2（前書き）

本編始まります

プロローグ2

「ムー兄ちゃんまた喧嘩してるんやろ？」

俺ははやてと共に図書館を出て、はやての家へと向かっていた。

「まあ、な。向こうから吹っ掛けてくるし、ああいうのは一度引くとすぐに調子に乗ってくるから断れないんだ」

ストレス発散でやってるのも否定はしないが

「駄目やで、ムー兄ちゃんの体生傷だらけやん」

「いや、この前凄^{フレシア}い強い人と喧嘩しちゃって」

喧嘩が嫌いなはやての前だからあまりこういう話はしたくないんだが。

「ふーん、でもムー兄ちゃんが喧嘩で怪我するなんて珍しいこともあるんやな」

「まあ…そうだな」

なんとかして話を変えたい、そうだ！

「そうだ、もしかしたら近々お前の家に住み込むかもしれないから」

「ほんまか!!」

おおう、そんな目を輝かせちゃって。

「おう、今の家の貰い手が決まりそうだな」

「そつかあ…嬉しいなあ、ムー兄ちゃんとまた住めるんや」

ここまで言われると俺も嬉しく感じる。

「確定したわけではないからな？　あくまでも可能性が出てきたってことだけだからな？」

「わかつとるよ、でも嬉しいんや」

そうこう話しているうちに家に着いた。

「今日会ったのもなんかの縁やし、泊まって行かへん？」

「いや、それは「泊まっていかがへん？」・・・はい、泊まらせていただきます！」

なに今の！？　やっべ、超怖かったんですけども！！

あの顔は笑ってるのに目が笑ってないとか冷や汗以外なんにもでてこないよー！！

「そつか、ほな行こつか」

途端に上機嫌になった。

まあそれでも地面を一回転して吹っ飛んだがねwww

「デメエ、よくもシグナムを！」

しまった、余計に怒らせてしまったようだ。

俺は鎚を避けながらどうすれば良いかと考えるのであった。

はやてside

いやあ、ほんま強いなムー兄ちゃん

シグナムとヴィータ相手に互角以上に闘っておる

「はやてちゃん、アレは一体何者なんですか？」

「見たところ魔力は持っていないようだが」

シャルとザフィーラが興味津々としとる

ふふ、どうやら二人は気に入ってくれとるようやな

「あの人はなうちの最高の天下無双な兄ちゃんや」

ムー兄ちゃんが拳の喧嘩で負けたなんて聞いたことも見たこともないからな

現にあの二人を圧倒しとるし

我が兄ながらに凄いなあ

そう思いながら紅茶を啜る

「おいしいい！ はやて、こいつらとめろ！」

必死に頼んでくるムー兄ちゃん

しゃあないなあ

うちは苦笑いしつつ二人を止めるために動き出すのであった。

S i d e o u t

「つまりは闇の書の主にはやてがなっ たらはやてを守る為に俺を敵と勘違いして襲ったと？」

「は、はい」

「すみませんでした」

素直に頭を下げる二人

「いや、別に構わねえよ。それよりお礼を言わなきゃな」

俺は二人に深々と頭を下げる

「はやてと共に居てくれて済まねえ、礼を言う」

「そんな頭を上げてください兄上！」

「そうだぜ！ 頭を下げることなんてしてねえだろ！！」

そう言われてもな、はやてを一人にさせちまつたのは事実だし

お前らが居てくれて本当に俺は助かった。

はやても家族が増えたみたいで喜んでるし、寂しい思いをさせちまつてた。

なんて俺は不甲斐無い兄貴なんだ。

「まあ、そんなことよりもお互い同士仲良くしてこつや」

はやての言葉で俺も顔を上げて二人と握手をする。

「我が名はシグナム、主はやての剣です」

「私の名はヴィータ、よろしくな兄貴」

「俺の名は神楽坂神威、不肖ながらはやての義理の兄だ」

こうして俺は二人…もとい四人との邂逅を終えたんだった。

その日の夜の守護者たちの会話

「なあ、兄貴って本当に人間だよな？」

「闘いながら分析もしたが魔力は感じられなかったぞ？」

「もしかしてザフィーラみたいな獣人みたいな感じなのかしら？」

「いいや、人外の匂いはしなかったな」

「でも私たちの動きについてこれたし、割と本気の攻撃も普通に受け止めてたぞ」

「私の剣も『白刃流し！』とか言いながら受け流しつつ攻撃してきたぞ」

「見てたわよ、確かに人かどうか疑ってしまっわね」

「・・・しばらく様子見しかあるまいな」

守護者たちの疑問は深まるばかりであった。

プロローグ2（後書き）

地震と停電が怖い

第八話（前書き）

東方のゲームが弾幕過ぎて困るWWW

第八話

日差しが良い今日

八神邸の庭には二人の人物が闘っていた。

「ふっ！ はっ！」

「そりゃ！」

俺とシグナムは組手をしている。

始まりはシグナムが朝食の時に昨日の件について聞いてきたことが始まりだった。

「ところで兄上」

「なんだよ？」

シグナムは食事をしながら俺に問う

「昨日戦っていて感じたのですが何かの武道はやってらっしゃるのですか？」

ああ、そういえばこいつバトルマニアだったな。

「別に、毎日いろんなやつらと喧嘩してるだけだ」

「なんですと!?!」

シグナムが椅子から立ち上がり声を荒げる

「煩せえな、おいヴィータ箸の持ち方が間違えてるぞ」

「ん、すまねえ」

こういうのは早めに直さなきゃ将来、社会に出たときに恥をかくことになる。

「兄上、それは本当ですか!」

「煩せえって言うてんだろ、ちったあ黙って食べねえのかベシ!」

俺がシグナムに文句を言うとはやてにハリセンんで頭を引っ叩かれた。

「ムー兄ちゃん、相変わらず口が悪いで」

「す、すまん。つい癖でな」

こればかりはどうしようもないのだ。

治せと言われても簡単には治せない。

「喧嘩だけで私達と互角に渡り合えるなんて……」

なんかショック受けてる

「喧嘩つてのは世界共通であり、世界最古の武だ、たかだか殴り合
いなんて考えてると痛い目見るぞ」

眼突き、金的、武器、絞め技、騙し、策略、正になんでもありの野
生の戦い。

どんな勝ち方であろうとも、どんな汚いやり方であろうとも、勝て
ば正義だ。

「人間誕生以来、もつといけば生物が誕生した時から喧嘩つてのは
行われている。中国4000年だと言ってるがこっちは億単位だ、
積み重ねが違う」

とまあ、弁明してみたり。

「それに、毎日戦ってりゃあ嫌でも強くなるさ」

「……そうですか」

どこか納得のいかない顔をしているがシグナムは立ち上がって。

「兄上、私と闘ってくれませんか？」

「断る」

俺はばつさりと切り捨てる。

「なんで俺がお前と闘わなきゃいけないんだ、シャルル顔に米粒つ

いてんぞ」

「ですが我らとしても主はやてをお守りするために日々精進を――

――」

「知らねえよ」

もう一度切り捨てる。

「うう」

するとシグナムが若干涙目で黙ってしまった。

「ち、しゃねえな。一度きりだぞ」

「兄上！」

「勘違いすんな、お前がキャンキャン喚くのが目障りだからだ。そんな感謝の目で見てるんじゃないぞ」

そうこいつが喚くからしょうがなかだ。

俺が了承すると嬉しそうな顔をするシグナム

「まったく、現金なやつだ」

やれやれと息を吐く

はやてなんだよそのニヤケ顔は

「いや、やっぱりムー兄ちゃんらしいなあと思ってな」

「……気まぐれで受けたただけだ、変なこと言うんじゃない」

なにが気まぐれだし、俺の馬鹿野郎

と、そんなことがあります。

現在

「そらそらそら！ どうした手が止まってんぞー！」

「くっ、なんて重い一撃なのだ」

そりゃあ2%だもん。

トラックぐらいなら楽に持ち上がるぜ。

むしろそれを受けて踏ん張れてるお前が凄いよ

剣もヒビ入らないし、なんなのそれって。

「はあ！」

「ち、らあ！」

俺の猛攻の間を縫うようにシグナムが反撃してきた。

その攻撃に俺は咄嗟に蹴りで反応し、剣を弾き飛ばす。

そのまま俺はシグナムの顔スレスレに蹴りを放った。

「……俺の勝ちみてえだな」

「……そのようですね」

流星は騎士を名乗るのか、俺がワザと外したことを理解しているようだ。

「最後の反撃は良かったが、まだまだ甘いな」

「耳に痛いお言葉です、修行不足でした」

闘い終わった後は互いに一礼、マナーだね。

木陰で紅茶を飲みながら観戦していたはやて達の下に行くと一番最初にヴィータが走ってきた。

「兄貴、お疲れ様！」

「おう、ありがとな」

ヴィータが持ってきてくれたタオルを受け取り汗を拭く

予想以上に疲れたぜ。

お礼というわけではないが俺はヴィータの頭を撫でてやる。

顔を赤くしてやがるがどうしたんだ？

まあ、嫌がつてるわけでもないし続けるか。

「ヴィータずるいなあ、ムー兄ちゃんうちも撫でて」

言われた通り撫でてやる。

なんか妹が二人になった気分だ。

「そうだ、はやて。俺今日家のことでちょっと大事な話あるから、ちよいと出かけてくる」

「そっか、行つてらっしゃい」

シグナム達が居るし、一人にはなんと思つがそれでも早く帰つてきたい。

俺が居ない間になんか事件とか起きなきゃ良いがな。

あれ？ いつの間にかここに住むことが前提になつてる？

……気にしたら負けだ。

大丈夫、俺は気にしない。

てなわけで俺はアースラのブリッジに来た。

なんかKY君が鬼のような形相で睨んでくるがスルリと流す。

「で、結局あいつらはこの街に住むのか？」

「ええ、そうなってるわ」

あいつらとはテストロッサ家のことである。

「じゃあ、良いぜ。俺の住んでる場所を貸してやる」

「あら、本当にいいのかしら？」

「良いのも何の、月五万で貸してやるって話は前々からしてただろうが」

裁判が終わったなら海鳴に住みたいとプレシア・テストロッサが言ったので月五万で貸してやると言ったら大喜びされた。

なのは家の隣だし、なのはも喜ぶだろう。

「それだけ言いに来た」

「え？ 本当にそれだけ？」

「プレシア・テストロッサ事件の顛末も詳しく聞きたいがその三流KY野郎が睨んでんでな、帰らせてもらう。月の代金は指定している口座に振り込んで」

足早に俺はここから出る。

アースラは嫌いじゃないがあのに三流KY野郎の視線が気に入らねえ。

これでアースラ編終わり

うん？ 速すぎだつて？

良いんだよ、これが所詮は作者の限界だ。

作者つてなんだ？

とにかく俺はアースラを後にするのであった。

リンディ side

「あ、彼の連絡先聞くの忘れてた」

私としたことがうつかりしてたわ。

「それよりも、ちょっとクロノ」

不機嫌そうなクロノを呼ぶ

「なんだい母さん、今の事なら褒めてほしいぐらいだね。三流扱いされて怒らなかつた——」

そうじゃないのよクロノ

「ふふふ、そういうところが彼に三流呼ばわりされるところなの。ちよつとO・H A・N A・S I Iがあるから」

「え？　ちよつと待ってくれ母さん！」

神威が去った後、アースラに少年の悲鳴が響き渡ったとかなかったとか。

第八話（後書き）

今回はちょっとばかり設定についてお話を

まず主人公ですが早生まれでなのは達よりも一つ学年が上です。

基本的に毎日、近所の不良共から喧嘩を吹っ掛けられて喧嘩しています。

なのはとは幼馴染です。

クロノのことを神威は三流あつかいしています。

クロノは神威のことを嫌っております。

ちなみに今の話の時期ですが七月の夏休み突入直前です。

それぐらいかな？

今後、どうなるかはほどほどに期待してお待ちください

第九話（前書き）

うむむ、ネタがない。

第九話

なのはside

このところ、またムー君が帰ってきてないの。

家に忍びこんで確認してるから間違いないの。

喧嘩ばかりしてるからどこかで大きな怪我してるんじゃないのか
って心配だよ。

「どうしたの、なのはちゃん？」

「ふえ？ ああ、うん。このところムー君が家に帰ってきてなくてね」

「あいつが？ またなにか悪さしてるんじゃないの？」

アリサちゃんの中ではやっぱムー君の評価はそうなんだ。

私は今、アリサちゃんの家遊びに来ています。

こうやって紅茶を飲みながらお話するのは楽しいけども……

「ムー君は悪さなんて自分からはしないよ」

「そうかしら？ まあ、助けられた身としては肯定してあげたいんだけどね……」

すずかちゃんも頷いている。

ちよつと昔、私達三人が誘拐された時

ムー君に助けられたことがあつて、アリサちゃん達がムー君の認識を改めそうになったんだけど…

「あの態度はねえ……」

「ははは、そうだよねえ」

そのお礼を言いに行ったらムー君が

『別に、お前らの声が五月蠅かったから様子見しただけだ。そしてあの黒服共が襲ってきたから返り討ちにしただけ。礼を言うぐらゐなら誘拐されねえように気をつけやがれ馬鹿共』

とか言つてさつさとどっか行つちやうんだもん。

照れ隠しは分かるけど口が悪いの。

あんなんだから友達がすくないの。

「ふむ、あの時の少年の話ですか」

話に入ってきたのはアリサちゃん家の執事の鮫島さん。

「ええ、そつえば鮫島はあいつのこと気に入ってたわね」

「はい、中々どうして。素晴らしい瞳の光を持った少年でした」

そうなの？

良く、濁ってるだとか腐ってるだとか死んでるだとか怖いだとかは聞くけどそんな褒められてるのは聞いたことがないの。

「表面は確かに濁っておりますが中身は光り輝き、あの眼の輝きを持つ者は己を貫き守るものの為ならばすべてを犠牲にしても守れる存在です。私も見たときは息を飲みました」

凄いの、鮫島さんがムー君のことベタ褒めなの。

「へえ、鮫島さんがそんなに人を褒めるなんて珍しいね」

「まったくよ、あんな不良を褒めるなんておかしいわよ」

「むう、ムー君は悪い子じゃないもん」

皆、酷過ぎなの。

ムー君はちよつとばかり不器用なだけなの

ジュエルシード事件の時だってどうやったかは知らないけども時の箱庭に一人で乗り込んでフェイトちゃんの為に戦ってくれたし

でもムー君ってフェイトちゃんと面識ってあまりなかったよね？

それでも助けたの？

だとしたらやっぱり優しすぎなの

お礼を言いたいけど、あれ以来会えてないの。

お隣に住んでるはずなのに会えないって……不思議なの。

決めた、今日帰ったらムー君の家に乗り込もう。

「ふええ！　ムー君居なくなっちゃったの！？」

そう決めた数時間後、家に帰った私にお母さんがそう告げてきた。

「ええ、なんでも海外に行ってた本来の家の持ち主がなんとかって
言ってきて自分は出て行くらしいわよ」

ムー君の家、つまりは私の家の隣なんだけど元々はムー君の家じゃない。

詳しい理由は知らないんだけど、なんでも親戚が渡してくれたとかなんとか。

だから自分の家じゃないので親戚が出てけと言われたらそうするしかないらしいの。

「ムー君はどこに住むの？」

「詳しく聞いてないけど、海鳴の親戚の家らしいわ」

もう、勝手に出てっちゃって。

少しは相談してほしかったの！

そしたら家に泊めさせるなりできたのに！！

少し心配なの、親戚の家で嫌われないかな？

ムー君のことだからまた喧嘩とかして怪我しそうだし……ここまで心配させるなんて次会ったら絶対にO H A N A S Iなの！！

この時、神威に寒気が走ったのは言うまでもない。

s i d e o u t

シグナム s i d e

神楽坂神威

主はやての兄上であり、主はやて曰く『拳の喧嘩では負けたことがない』と言うお方

実際に本当であろう。

私とヴィータ、魔法なしとはいえ二人掛かりでも倒せなかったのだ。

そんじょそこらの敵に負けるはずがない。

とにかく兄上は強い

ちらつと横を見る。

そこには不機嫌そうな顔で買い物の袋を持った兄上が居た。

兄上はいつも不機嫌そうな顔だ。

でも本当は優しいのだと理解している。

主はやてに対して時々向ける優しげな笑顔

我々に対して安心させるような小さいのに大きく見える背中

なにを背負っているのかは分からないがなにか大きなものを背負っている者にしか見せないような大きな背中も持っている。

剣と拳を交えて分かったのだがこの方の魂は気高い

私のような騎士は戦った相手の魂が解る。

そのものが外道だったら目や剣筋が濁る、ならば逆も然り

兄上の目は表面は腐っているように見えるが奥に純粹な燃え盛る炎を宿し、拳筋は清らかだった。

一撃も重い

たった数発で善なる者だと分かった。

話がずれた

私達は夕飯の買い物を終えて帰宅途中だった。

なんでも今日から兄上がうちに住むらしく、記念に私達に料理を振る舞ってくれるそうだ。

本来なら主はやてが振る舞うつもりだったらしいのだが今日は生憎と病院で出来なかった。

仕方なしに兄上が作ってくれることになったのだ。

「見つけたぞ神威！」

そんなことを考えていると四、五人ほどの手に鉄パイプなどを持った中学生ぐらいの男たちが現れた。

「兄上、どうしますか？」

私が一瞬で片づけても良い

「……まだ、俺に喧嘩売る奴いたのかよ」

兄上は呆れたような感じで呟き、私を手で制しながら前に出る。

「…見ない顔だが余所から来た奴らか？」

「へへへ、良く分かったな」

「てか隣の姉ちゃん美人じゃね？」

「さつさとボコして姉ちゃんと遊ぼうぜ」

下卑た笑いを上げる男共、殺してやろうか？

「そうかい、ならお前等さつさと死ね」

「はっ？」

この時、私は驚いた。

なんせ兄上が私ですら凍えるような低く冷たい声で言ったと思ったら、そのまま真っ直ぐ男共の方へと歩き一番近くに居た男の頭を掴み手裏剣の様に投げたのだ。

そのたった一発ですべての敵を吹き飛ばした。

「え？」

何が起こったかわからない。

理解は出来るけども、処理が追いつかない。

「いくぞシグナム」

「は、はい！」

至ってなんともないように歩き出す兄上

………強い

そう改めて思った日だった。

side
out

第九話（後書き）

次回から本格的に話を進めていききたいと思います。

第10話（前書き）

風が強い、今日は一日引きこもろう

第10話

??? side

「なんですかこれは！」

聖王教会

そこでとある少女が驚愕の声を上げていた。

「もしもこれがそういう意味ならば…騎士カリム!!」

「はっ！」

「人を集めなさい！ 至急よ!!」

これは始まり、物語の歯車は回り始めた。

side out

神威 side

俺は八神邸の屋根の上に寝転び夜空を見ながら反省をしていた。

「……………停学届出しちまったな」

仕方がない、闇の書の一件が解決するまではなのは達と接触するわ

けにもいかないし

学年一つ上だけどあいつ平気で俺のクラスに来るからな。

確か原作通りならばフェイト・テストロッサも入学してくるはず。

ふざけんな、学校が俺にとって最悪の場所になるじゃねえか。

折角、良い昼寝場所だったのに。

屋上とか、教室とか、保健室とか

一応はテストとかで良い成績ってかトップとれてるから良いけど

流石に出席日数がねえ

ま、大丈夫だろう。

そんなことよりもだ。

「……………またかよ」

最近俺は幻覚を見る。

別にそういう薬を使ってるわけじゃない。

幻覚と言っよりも夢

なんかすごいオーラ纏ってるやつがこっちを向いて立ってる

それだけだ。

顔はわからん

夢のせいか、顔が見えないのだ

声は発してない…多分

そんなもってなんかの広い魔方阵の上で空中に浮いてる。

下は破棄されたっぽい街がある。

ただ俺とそいつが向かい合ってるだけ。

相手は男なんだろうけど、なにもわからない。

ただ、凄く強い。

戦ってみたくはあるが、戦いたくないって気持ちも同時にある

なんなんだろうな、一体？

俺は溜息を小さく吐いてもう一度夜空を見上げる。

「こんなところに居たのか」

「ん？ おお、ザフィーラか」

ザフィーラがやってきた。

犬モードから人型に変わり、俺の隣で胡坐をかき始める。

俺もそれに習って座った

「ザフィーラ、一杯付き合え」

「カムイ、どこからその酒を出した？ しかも未成年であろうが」

「気にすんな」

それは聞かないお約束だぜ

「ふむ、では……」

お互いに酌を注ぎ、月見酒と洒落込む。

今日はなかなか綺麗な月だな。

「ザフィーラ、どうだこの夜天は？」

「美しい、今まででどの世界よりも美しいな」

「カカカ、戦艦とか浮いてないだろう？」

「ああ、平和だ」

闇の書の守護獣として今まであらゆる時代のあらゆる世界を見てきたであろう

しかしそこではいつも、道具としてしかこいつらを見ない奴らばかり

りだった。

「……………考えたことはあるか、この星のことを？」

「どういう意味だ？」

俺は不意に口にする。

「この夜天に煌めく星々の数々、その一つがこの星…地球だ」

「そんなことはわかっている」

「ならばこの星々が一つのシステムと考えたことは？」

「……………どういう意味だ？」

「宇宙と言う機会の情報装置、その一つだ」

「待て、いきなり何を言っている」

確かになんにも分からんよな、でもこれは重要なことなんだ。

「森羅万象のすべてがこの星には記憶され、堅い門で閉じ込められているとしよう。だがもしも、その扉の向こう側を見れたとしたらその向こうには何があると思う？」

「…カムイ、それではお前がその向こう側とやらを見たように聞けるぞ」

若干、困惑したようなザフィーラの声

「ザフィーラ、これはお前だけには話しておこうと思っことがある」

「なんだ？」

万が一、億が一に備え、誰かに知ってもらわねばならんだ。

「俺の力の全てについてだ」

「っ！？」

ザフィーラの顔が驚愕に染まる。

さあ、これから語るわ“剛腕”と呼ばれし者の真実と宿命

これが後にどう影響するかはわからんがな。

「なるほど、それならば全てに納得がいく」

俺は全てを話し終え、もう一度夜天を見上げて盃を傾ける。

「魔力がないのにその強さ…魔導に対する知識、ジュエルシードを使えたという理由、なるほどなるほど」

「ああ、これが真実だ。“剛腕”の宿命を背負ってきた者達共通の秘密であり、知る者は管理世界全てを探しても数人といないだろう」

「良いのか？ そのようなことを俺に話して」

「お前だからだよ、これからなにが起こるか分からないし伝えられるうちに全てを伝えとかねばならないだろう？」

「そうだな、そのようなことを誰も知らぬままでは不味いことが起きる」

「そのせいで過去の“剛腕”達の多くが暴走してしまった」

プレシア・テストロッサから聞いたときはまだ分からなかった。

しかし俺があのような夢を見始めてからこのことがわかり、繋がった。

「もうしばらくしたら、はやてに確実に災いが起きる。その時は任せろ」

「安心しろ、絶対に守り通して見せる」

なら安心だ、しっかりと守ってくれよ？

「大変や！ ムー兄ちゃんがおらへん！」

「兄貴どこだ！」

「兄上！ どこにおられるのですか返事をなさってくださいー！」

「カムイクゥン、どこですか？」

なんだか下の方が騒がしい、お前等が寝てから出て来たのに…

「ははは！ お呼びだぞ」

「お前は呼ばれてないみたいだぞ？」

「なんだと！？」

うわ、可愛そう

「そうだザフィーラ！」

「せや、ザフィーラがおる！」

お、呼ばれたぞ良かったな

「ザフィーラが居ませんよ」

「なんだよ、これじゃあ兄貴の匂い探せないじゃんか役立たずだな」

「役立たずですね」

「うむ、役立たずだ」

「役立たずやな」

その言葉を聴いた本人は

「役立た……ず、この俺がorz」

哀れだなザフィーラ、掛ける言葉が見つからない。

「ムー兄ちゃんが居なくなってたからやる!」

いや、だって流石に女全員と同じベットってのはなあ

よく家にその広さのベットが合ったって俺は感心しているが

「さっさと兄離れしろや」

「「嫌や／嫌だ／嫌です」」

はやて、ヴィータ、シグナムの三人が声を合わせてそう言う

「シャゝマルウウウ」

ちくしょう、もうシャマルだけが頼りだ

「あら？ 私も一緒に良いと思うわ」

貴様もそっち側だったか

「普通はお前ぐらいの歳だったら一緒に寝るのを拒否するぞ」

「それでもや、一緒に寝るんや!」

「そつだそつだ!」

なんなの？ なんか俺ってば凄いアウエーなんですけど

「……………今日だけだぞ」

「「「やった!」」」

そんなガッツポーズされても…シグナム、お前はやて抱えたままガッツポーズって器用なことすんな。

こうして俺は渋々ながら一緒に寝ることになった。

余談ではあるが翌朝までザフィーラは屋根の上で落ち込んでいた。

side out

??? side

ここはとある管理外世界

「ククク、真の聖王がこの世に存在しない今、計画成功までの道のりは容易い」

奇妙な機械音をする室内で恍惚とした表情をした女がいた。

「さあ、お伽噺を始めましょう」

新たな歯車は動き出しているのかもしれない

side out

第10話（後書き）

コタツって良いですね。

家は万年コタツで冬はぬくぬくしています。

温かくなる前のコタツに足を入れると凄く冷たく感じるのはなぜでしょう？

これは研究せねば！

……自分で言っておいてなんだが下らねえ

というわけで、次回をお待ちください！！

第十一話（前書き）

どうも、お久しぶりです。

久々ですが文字数が少ないぜ。

ああ、作品を同時に書きすぎている俺のミスだな。

第十一話

目を覚ますとシグナムの抱き枕にされていた。

「どうしてこうなってるんだ？」

確か昨日の夜… ああそうだ、無理やり寝かされたんだっけ

周りには他の全員が寝ている。

ザフィーラだけ居ないが

夜中、途中で何度も逃げ出そうとしたがその度に見つかってしまい最終的にシグナムが逃がさないようにと俺を捕まえたまま寝た結果がこれらしい。

まあ、豊かな二つの柔らかい山に挟まれるのは嬉しいな。

逃げ出そうにも動いたら色々とやばいし

色々ってなに、だって？

そこは察しやがれ

とにかく行動不能だ。

ちくしょう、良い寝顔しやがってシグナムめ

結局そのまま二時間動けなかった。

一方その頃、アースラでは

「なんということだ」

クロノ・ハラウンが一つの書類を見ながら頭を抱えていた。

これは聖王教会から送られてきたものでエイミィから渡されたコピーである。

そこには予言が記されていた。

真の覇、目覚めし時

剛の名を背負いし者、獣の王と相對する

彼の者は

夜天の騎士を従え、星の光を破り、雷光を切り裂く

古の魔法の都市で真の覇と真の剛が交える時

聖なる王の復活への道標となりけん

この予言の最後『聖なる王の復活への道標となりけん』

聖王教会はその名の通り聖王を崇めている

つまりはだ、聖王の復活の可能性があるのならば聖王教会は全勢力を持ってこの予言実行に力を注ぐはず

管理局の提督達にもこの書類は渡され、管理局も秘密裏ではあるが協力体制に入った

そしてこの予言の人物にP・T事件に関わったクロノ達には心当たりがあった。

“ 剛の名を背負いし者 ”

魔力も無いのにプレシア・テストロッサと互角以上に戦っていた少年

神楽坂神威

先日もアースラに来て、地球でのフェイト達の住まいを提供してくれた

彼は希少能力レアスキルを持っている

過去、管理局が発見したのはたったの数人

しかしその数人はどれも手練れ

Sランク以上の人間しか戦えない相手ばかりだったらしい

そのレアスキルの所持者は総じて“剛腕”と呼ばれる

クロノも何度か神威の戦闘を見た

正に“剛”の名に相応しい戦いだった。

柔を剛で断ち、魔を剛で碎き、圧倒的な暴力を見せつけた。

わずか10歳にしてあの力量

もしも成長してしまつたら…考えるだけでも恐ろしい

そんな彼が聖王教会に狙われているのだ。

「……アースラはこれより地球の軌道上へと向かいます」

艦長であるリンディが言う

その顔は些か優れていない。

新たな役者も着々と舞台へと登るために迫ってきていた。

シグナムside

「……………なあシグナム」

「なんでしょうか兄上？」

私と兄上は天気良かったので庭で一緒に紅茶を飲んで居た。

「なんでもお前は俺を膝の上に載せて抱きついてるんだ？」

「それはまた逃げないように主はやてからのご命令です」

主はやてが『ムー兄ちゃんがまたどつか逃げ出さんようにしっかりと見ておいてな』と仰ったので一番良い方法を考えた結果これが一番と判断したまで

しかし、なんだろうか

兄上は抱き心地が良い、それになんか匂いも……

ついもうちょっと強く抱きしめてしまふ。

「なあ、抱きつく力がすごく強いんだが？」

なんか言ってるが私は気にしない。

「ああ！ なにやってんだ（るんや）シグナム！！」

ちっ、来てしまったか。

だがこの居場所は主はやてとも言えども渡すわけにはいかない。

ここに私の新たな戦いが始まった。

side out

??? side

ここはとある管理外世界

「イヤアアアアア!!」

「ヤメテクレエエエ!!」

「助けて!!」

その管理外世界にあるのとある村は破壊の限りを尽くされていた。

家は燃やされ、人は炎に包まれている。

「……………」

そんな地獄絵図を見下ろす一人の男

「俺は、また殺さねばなんのか」

男の頬には一筋の涙が流れ落ちた。

s i d e o u t

第十一話（後書き）

次こそは頑張るZE！

第十二話（前書き）

なのはの作品も両方揃ってA・S編です。

先は長いぞ。

第十二話

月日は流れ、12月1日

俺は非常に焦っていた。

「（なんだってんだよ……なんでなのは達が！）」

この街で結界が張られたのを感じた俺は家の屋根を跳びながら結界内へと入り込んだ。

そこではヴィータがなのはと戦闘を行っていたのだった。

ちっ、はやてから人からの蒐集は禁止されてただろうがよ！

だが俺も事情は分かっている。

はやての脚の具合は以前よりも酷くなっている。

このままいけば命に係わるほどまでに。

俺がヴィータ達の立場だったら同じことをしたかもしれん。

「……………くそが」

仮にもクラスメイトだぞ。

助けるか？

だがそうしたらはやてを助けられない。

そう考えている間にもなのはがビルに叩きつけられて、ヴィータに蒐集されかけている。

友を取るか、妹を取るか

ある意味での究極の選択

俺は

答えを出そうとした時、ヴィータのアイゼンが振り下ろされる。

しかしその一撃は突如転移してきたフェイト・テストロッサに阻まれた。

良かった

でもこれで、俺の立ち位置は決まったな。

ヴィータが外へと飛び出してくる。

それに続くようにフェイト・テストロッサも外へ

「あら、そんな風に他人を気にしていいのかしら？」

声が俺の耳に届いた瞬間、空に居るヴィータの近くまで一気に跳び上がった。

そして、俺が一瞬前まで居たビルは飛来した雷によって破壊されていた。

「兄貴／神威さん！？」「」

ああ、クソ！

バレちゃったじゃねえか！！

だが、今はそんなことにしている場合じゃないか。

俺はそのまま、下にあったビルの屋上へと着地して先程まで居たビルの方を見る。

「久しぶりね、剛腕」

「そうだな、久しぶりだな大魔導師」

はあ、最悪だ。

恐らくは一番厄介な相手が来やがった。

プレシア・テストロッサ

フェイト・テストロッサの母で、Sランクの魔導師である。

過去に二度も殺りあっている。

「随分な御挨拶だな、あんなの喰らったら死んじまうじゃねえか」

「ふふ、安心なさいな。非殺傷設定だから死ぬことはないわ。それに――」

プレシア・テストロッサの周囲に五十は超える魔力弾が浮かび上がった。

「“剛腕”にこれぐらいはしなきゃ逆に殺られるでしょうが――！」

一斉に俺に迫ってくる魔力弾の数々

「ちっ、用心しすぎなんだよ――！」

ビルから飛び降りてなんとかそれを回避する。

「ヴィータ！ こいつの相手は俺がなんとかすつからはやく蒐集しろ――！」

「え？ でも――！」

「いいからしやがれ――！」

地面への着地と共に駆け出す。

既に反動がギリギリない9%も力を出してるんだ、プレシア・テストロッサの攻撃はともかくとして他の魔導師の攻撃はかゆくも無い。だから、最優先に潰すべきはあいつだ。

「あなた、本当に十歳？ 戦いに慣れ過ぎでしょう」

「五月蠅いんだよ、さつさと死にやがれ」

「あの時は生かしてくれたのに、今度は死ねですって？ 自分勝手な男は嫌われるわよ」

「知ったことか」

こうしている間にも俺は高速で走り、それを追うように魔力弾が降り注いでいる。

「（こんなことしてる場合じゃないんだよ、なのは達の魔力を蒐集すればあと数ページぐらいまで迫れるかもしれないんだ）」

もう全体の8割は蒐集を完了している。

あともう少し、もう少しなんだ。

だからこそ、俺が今やるべきなのはヴィータが勝つまでの時間稼ぎだ。

「逃げ回ってばかりでは私を倒せないわよ」

「……………」

良いんだ、挑発にのるんじゃない。

「兄貴!!」

「お前、なに捕まってやがるんだ!？」

なにやってくれてんだよヴィータ

どうやら気が付かぬうちにフェイト・テストロッサとアルフの二人を相手にしていたらしい。

両手両足をバインドで拘束されているヴィータ

助けに行きたくてもプレシア・テストロッサが邪魔でいけない。

「…………行くか」

ならば、被弾覚悟で強行突破をしかけるしかない。

だが俺の覚悟は少し遅かったらしく

「終わりだね、名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ」

「なんかやばいよ、フェイト！」

そうアルフが言った瞬間、フェイト・テストロッサにいきなり現れたシグナムが斬りかかった。

その攻撃を防いだフェイト・テストロッサは少しばかり後退してしまった。

「シグナム…………」

「うおおおおおおおー！！」

更に意表を突く形でザフィーラがアルフへとハイキックを喰らわせ

る。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

シグナムの魔力が爆発的に上昇し、レヴァンティンから炎が噴き出てきた。

「紫電一閃!!」

必殺の威力を持つ一撃が放たれる。

バルディッシュの柄で受け止めようとするがそれは中心から真つ二つに斬られてしまった。

そして更にもう一太刀

「defenseer」

バルディッシュが緊急で防御魔方阵を張り、直撃こそ防いだものの威力に耐えられずに真下のビルへとフェイト・テストロッサは叩きつけられてしまった。

「フェイト!」

声を荒げて主の下へと向かおうとするアルフだがそれはザフィーラによって止められてしまう。

「形成逆転……ざまあ見やがれ」

「くっ、やるわね」

さあ、ここからが本番だ。

なのはside

「フェイトちゃん、アルフさん」

「まずい、助けなきゃ」

ユーノ君が呪文を唱えると私の足元に魔方阵が現れたの。

そして、その魔方阵を包むように結界が張られる。

「回復と防御の結界魔法、なのはは絶対にここから出ないでね」

「う、うん」

空へと飛び上がってフェイトちゃん達を助けに向かうユーノ君

私はそれを見送って今度は違う方を見る。

「ふふふ、面白くなってきたわね」

「面白くなってるねえよ、とっとと死にやがれ」

プレシアさんの魔力弾の雨をギリギリで避け続けるムー君

なんでここにムー君が居るの？

急に家をフエイトちゃん達に渡して、学校も休学して

それで今度はなにをやっているの？

私を襲ってきた子の仲間っぽいし、もしかして――

「ああ、そうなんだ」

ムー君は私を殺そうとしてたんだね。

だっていつもいつもしくしくしてたもんね。

そっか……ムー君、いや――“神楽坂神威”は私の敵なんだね。

この時、私の中には黒いなにかが生まれてしまった。

s i d e o u t

第十二話（後書き）

感想とか、秘かにお待ちしております。

第十三話（前書き）

さあ、頑張って書いていこうか。

第十三話

神威 side

形勢は逆転した、ここで一気に攻めたてておきたいところだが……

「お前等、全員退け」

ここで戦っても意味がない。

むしろ、俺らは互いに相手の戦力を知らないんだ。

こちらの情報は教えるつもりはないのだが未知数の相手と交戦するのは危険すぎる。

特に相手は時空管理局だ。

俺というイレギュラーが存在するのだし、向こう側にもイレギュラー戦力がいないとは否定できない。

プレシア・テストロッサもイレギュラーの一人だしな。

「兄貴、でもそれじゃあ！」

「蒐集するのが確かに一番の目的だが、ここでもしも交戦して疲労したところに第二戦力が来てみる。それこそみんな捕まって、あいつも捕まる。そしたら全部がパアだ」

苦虫を噛んだような表情にヴォルケンリッター全員になる。

「……………兄上の言う通りだ。全員、帰還するぞ」

シグナムの言葉で俺達は帰還するためにワープした。

「行ったか……………てなわけで退かせてもらうぜ大魔導師」

「しょうがないわね……………次に会ったらわかってるわね？」

「はっ！ どうせ次も戦場で会った。つまらねえこと聞くんじゃねえよ」

俺もかなりの力をだして高速で跳躍する。

並みの魔導師や、機械では追えない速度なので問題はないと思うが遠回りをして追っ手を気にしながら帰還した。

屋根の上、俺はまた一人で月見酒をしていた。

お酒は二十歳になってからですだって？

良いんだよ、俺の精神年齢は二十歳超えてるから。

しかしながら、今日も夜天が綺麗だ。

「またお前はここにいたのか」

「ん？ おう、ザフィーラ来たか」

夜、俺とザフィーラはここでよく一緒に月見をしながらのんびりとする。

「……………今日戦った魔導師、お前の知り合いなのか？」

「……………おう」

「確認の為に聞くが、退いたのはやつらのためか？」

ザフィーラが疑いの眼差しを向けてくる。

「ザフィーラ、もしもそれを本気で言っているのなら俺を侮辱したと見なすぞ」

「ふふふ、確認のためだ。そう怒るな」

わかってるさ、じゃなかったらとつくにキレてる。

確かに相手が知り合いならば情を掛けてしまうのが人だ。

だが俺はそんなもの一切掛けない。

「別に俺はあいつらの事が好きじゃないし、倒すのなら倒して蒐集しよう」

「ふ、やはりお前は素直ではないな」

「どういう意味だよ?」

「なんでもないぞ」

くそが、なんだかザフィーラにからかわれてる気がする。

いや、実際にされてるな。

「真面目な話、俺ははやての味方だ。闇の書を完成させればはやての脚は治るのだろう?」

「ああ、その通りだ」

「ならば俺は誰に憎まれようとも闇の書を完成させる」

そつだ、絶対に完成させなければいけない。

絶対に、絶対にだ。

俺は決意を更に固くするのであった。

side out

??? side

「ワレ、メザメル」

獣は目覚める

「イニシエノ、ケイヤクニシタガイ、アラタナ“ケモノノオウ”ヲ
メザメサセヨウ」

それはこの物語にどのような影響与えるかはわからない

だがしかし、確実に波乱を呼ぶことは間違いがなかった。

s i d e o u t

第十三話（後書き）

感想お待ちしております。

第十四話（前書き）

はたまた閑話、伏線張りと少し伏線回収します。

第十四話

??? side

我が歩むは覇の道

我が掲げるは百戦錬磨の己が拳

我が超えるべき壁は誇り高き聖なる王

群雄割拠のあの時代には様々なことがあった。

始まりは我よりも凄まじき親友との別れから

そして先代との出会い、目標への現実的で明確な指針を示してくれた師との出会い

多くの戦友との出会いや別れ

辛いことも、悲しいことも、苦しいことも、嬉しかったことも

この身に刻んで邁進してきた。

そして、あの日――

「……………来たか」

我ら、ベルガの王が全員揃うのはこれで四度目だ

一度目は大戦の始まりの時

二度目は全勢力が総力戦を始めた時

三度目は最終決戦の前夜に酒を呑みあつた時

四度目は……今、この時、天下にその名を轟かせた“剛腕”の公開処刑の為である

多くの衆人觀衆が見守る処刑台の上、そこには両膝を付き、両手を両端の柱に吊るされている男が居た

「ああ、まったく、お前等なんて顔をしてやがるんだ」

呆れたような顔をして、処刑台から眼下に広がる民衆を見る男

「……あなたは強すぎた、新たな時代を迎えるのに当代の“剛腕”、あなたは居ては駄目なのです」

そう、この男は強すぎたのだ

つい先日 of 最終決戦、我ら王は結束し全ての力を持ってこの王を相手にした

互いに数千万の人間の血肉を握り固めて戦った

敵は強靱で末端の兵士に至るまでが正に一騎当千

「ははは、そうかい。そりゃあしょうがないな」

いつものように人懐っこい笑いをしながら言う男

「ったくよ、せめてお前とイングヴァルトの子の顔を見るまでは生きてたかったかな」

「「なっ／＼／」」

なんてことを言うんだ。

おい、他のお前等も笑うんじゃない。

最後まで敵わない奴だ

“覇王”としての俺なぞこいつにはつまらないまやかしに過ぎないようだ。

せめて最後まででも覇王としてこいつを送ってやろうと真面目にしているのに。

「“ジン” あなたは処刑されるといふのになぜもそのように笑っていられるのですか？」

こいつの死もってこの乱世に終止符を打つ

それがこの処刑の一番の意味なのだ。

では自分の死で世界を救えることが嬉しいのだろうか。

「ふ、ふふふ、はははははははは——っ！」

声を高らかにして笑い出すジン

「俺の死を持って乱世に終止符を打つ？ 残念だったな、乱世はまだまだ続くのだ！！」

両腕の鎖を千切って立ち上がるジン

だが取り押さえる者は誰も居ない

なぜなら――

「俺は最強の名を謳い、強者としてこの時代に君臨した。当然ながら実力も誰にも負けるとは思っていなかった。だがその最強も敗れ去ったのだ、この時代の新たな強者達に！！」

“強者”

ジンが言うその言葉の意味は全部は理解できていない、でも伝わってくる。

頭で理解するのではなく、心で感じ取っている。

「時代は常に前へと進み、若き輩は大輪の花を咲かせる」

両手を広げて、顔を上げ、まるで世界を祝福しているかのように語る

「強者は新たな強者に討たれ、さらに新たな時代を築いていく」

世界各地から集まった数万の大観衆が一人も声も発さずにその声に耳を傾ける

「これだから乱世は面白い」

高らかに笑うでもなく、高ぶる感情に声を荒げて笑うでもなく

心底面白そうに、微笑んだ

「オリヴィエ、イングヴァルト、ダールグリユン、イクスヴェリア、ラスティマ、シュライバー」

一人一人、王達の名を呼んでいくジン

「この後の世界、任せたぞ」

[illegible]

「その言葉で安心した……さあ、民よ、友よ、仲間よ、戦友よ！俺はどうやらここまでのようだ、しかし忘れるな！俺の死によってこの国は亡びない、我らがこの魂を己の胸に刻め、未来へとこの熱き情熱を継承させろ、この時代を生き抜いてきた我らの気持ちが誰一人として受け継がれずに潰えた時こそがこの国が亡びる時であり、俺が真に死ぬ時である！！」

両の拳を天に掲げ、まるで世界がこの男を祝福してるかのようなうた。

「皆、さらばだ。俺は先に逝つてゐるぞ」

俺らはその言葉と同時にジンの首を切り落とし、処刑を完了させた。

ああ、
やつぱり敵わなかったな。

最後の最後までこの男は“ジン”だった。

それにあの時の姿、あまりにも神々しかったんだ。

眩しすぎて、止められなかった。

なぜなら、あの姿はまさに誰もが羨み憧れる、真の王だったんだから。

s i d e
o u t

第十四話（後書き）

ネタバレが少しあったかもしれないがな。

第十五話（前書き）

ぬおおお、短いぞ！！

第十五話

なのはside

闇の書の守護騎士さん達の話を楽しんで聞いて、私はどうにかしてあの子達を説得できないかと考えていた。

ポケットから棒付きの飴を取り出して舐めだす。

「どうすれば良いんだろう？」

あの子達とちゃんと話したいのに、やっぱり闘うしかないのかな？

この前だって結界に閉じ込めたら神楽神威のせいで逃げられちゃったし

神楽神威が出てきたらプレシアさんぐらいしか戦えないの

当のプレシアさんはプレシアさんで神楽神威に興味があるみたいだし

あの二人は放置で良いのかな？

私の悩みは深まるばかりであった。

Side out

今日ははやてが友達の家泊まり込みだ

朝から俺もヴィータに付き添って随分と遠出している。

「……これで三ページか」

剛腕の力で身体能力がすべて向上しているせいかな疲れはあまりない。

流石にムカデに丸呑みにされかけた時は焦ったが。

既に何十対とムカデを倒しているが、まだまだ足りない

突如地下から現れたムカデを俺は高く跳躍して回避する。

「ちい、まだいやがったか!」

俺は“空気を蹴って”ムカデを貫く

その際に俺は全身ムカデの血だらけになってしまったが勢いが良かったせいで血が全部吹き飛んだ。

「ヴィータの下に行くか」

歩いて向かっていると向こう側で、ヴィータがムカデを倒したところだった。

「クソ、はやてに貰った騎士服をこんなにグチャボロにしゃがってアイゼンを引きずりながら、ヴィータは砂丘を登る。」

「まあ騎士服は直るし、そこそこページは稼げたから良いけどよ」
全身に傷を作り、血も流して、体力の消耗も激しいヴィータは転ん

でした。

「い、たく……ない……！」

歯を食いしばって立ち上がるヴィータ

「痛くない、こんなのちっとも痛くない！ 昔とはもう違うんだ……」

再び歩き出すヴィータ

「帰ったらきつと、温かいお風呂とはやてのごはんが待ってるんだ」
アイゼンを杖代わりにしながらも懸命に、一步を踏み出していく。

「優しいはやてがニコニコ待っていてくれるんだ」

ああ、そうだよな。

「そうだよ、私は、スッゲエ幸せなんだ」

お前も心の底からはやてを助きたいからそんなに必死になれるんだよな。

「だから！」

そして現れるムカデ

「こんなの、全然、痛くねえ……！」

気合の声と共にムカデと真っ向から対峙するヴィータ

だがヴィータは先程のダメージのせいか動きが鈍い。

このままではヴィータが食われてしまう。

俺はムカデの頭上まで一瞬で跳躍し踵落しを喰らわせてやった。

「つたく、無茶はあまりするんじゃないよ」

倒れかけるヴィータを胸で受け止める。

「あ、兄貴？」

「おう、今日はここまでにしよう。引き上げた」

もうこんな状態のヴィータを戦わせるのは無理だ。

「でもそれじゃあ！！」

「馬鹿か、ここで死んだら意味がないんだ。ちったあ考えろ」

ヴィータを担ぎ上げてシャルから貰った転移魔法石で転移する。

地球に戻ったところにはヴィータは規則正しい寝息をしながら寝てしまっていた。

「世話の焼ける奴だぜ」

呆れながらも俺はヴィータを運ぶのであった。

第十五話（後書き）

ネタがないっす
www
www
www

第十六話（前書き）

感想ぶり〜ず

第十六話

今日、俺が訪れたのはとある管理外世界

魔力量が高い人間が多く住み、また魔力持ちの動物も多い世界だ

いや、正確には“だった”

「……なんだよ、これ」

そこら辺に転がる腐敗した人や動物の死骸

激しい戦闘が行われたことを語る生々しい血痕と地面や家を抉ったかのような痕

俺が着いた時には既にこうなっていた

腐敗した臭いに吐き気を覚えながらも死骸を調べていく

そして死骸を調べていくうちに分かったことがある

一つはこれは同一犯の仕業

全部そうとは調べきつては居ないが十中八九そうに違いない

死体の特徴は心臓を貫かれているか頭が吹き飛んでいるかの二つがほとんどだった

傷跡からの判断で調べた全ての死体に似た箇所が発見された

もう一つは凶器

魔導でこれほど正確にピンポイントを貫ける技があるのかのかもしれないが、あえて言おう。

この死体たちは“一人の人間”が“素手”でやったと

これほどの人間を一人残さず素手で殺しつくすことができる人間

「ちと厄介な奴が居るみたいじゃねえか」

別に俺が手を出さなくても管理局の連中がどうにかするかもしれないが

「……どうもキナ臭えんだよな」

俺は死体を捨て、この世界から立ち去ろうとした

しかし、世界はそう簡単には俺を帰してくれないらしい

「おや、生き残りが居たのかい？」

ゾクッ！

全身から冷や汗が滝のように流れだし、咄嗟に俺は横に跳んだ。

それこそ、普段からは考えられない30%の力で

「……………早いのだな」

俺が一瞬前まで居た場所にクレータが出来ていた。

そのクレーターの中心には一人の男が

そして、その真上の空中には一人の女性が居た

女性の方は黒いロングの髪をしていて、ボサボサで寝癖だらけなのが特徴だ。

白衣を着ていて、戦闘要員には見えないが滲み出すオーラが明らかに普通の……KY魔導師とかとは一線を越えてる。

それよりも男の方を睨む

「……………霸王、クラウド・G・S・イングヴァルト」

よりもよってこいつが出てきやがったか。

「俺を知っているのか？」

「……………俺は今代の『剛腕』だ」

そう言うイングヴァルトは驚愕したかのような表情になった。

「そうか、お前が」

「ああ、そうだ」

クラウド・G・S・イングヴァルト

古代ベルカに存在したシュトゥラ王国の王

天地に覇をもつて、和を成せる王となる事を悲願していたが、生前の聖王オリヴィエに勝つ事はできなかった。

想いを寄せていた聖王オリヴィエを失った事で全てを投げ打って修練に打ち込んだ結果、皮肉にも一騎当千の強さを得て霸王と呼ばれるほどになったが、それでも大切な者を守れなかった彼の心は満たされずその短い生涯を終えたのだ。

そして、こいつは

「初代“剛腕”に憧れており、最後にも立ち会っていたのだろう」

「ああ、その通りだ」

初代剛腕の男の弟分であり、善王として国を任されていたはずの男だ。

「そんなお前がなんでここに居る?」

こいつの時代は古代ベルガのはず、なのになんで現代に?

「それは……」

苦虫を潰したような表情になる霸王

「世間話は終わった? さっさとやっちゃって」

上空の女が霸王に声を掛けてきた。

なるほど、理由は分からないがあの女がここにこいつがいる原因があるいは原因に関係しているのか。

「……叩き落とすか」

「悪いが、させんぞ」

間に先回りして入ってきて、俺を牽制するイングヴァルト

だがそのためにはこの霸王をどうにかせねばならないし、仮に出来たとしても空戦はできないので難しい

「ここはお互いに退きましよう、流石にこんな装備で“剛腕”となんて戦ったら勝てるか分からないし、あなたも管理局の人間と出会ったら面倒くさいでしょう?」

「……分かった、その提案を飲もう」

転移石で俺は時空を跳ぶ、同時に向こうも違う次元世界へと跳んだ。

少し、調べてみるか。

第十六話（後書き）

続きを書かなきゃな

第十七話（前書き）

お久しぶりです、第十七話になります

第十七話

一昨日、霸王が現れたことを調査していくことで判明したことがある
まず、被害にあったのはあの村だけではない

他の次元世界でもやつらは現れ殺している

しかも魔力を奪いとってからだ

狙うのはあまり文明のレベルが高くない場所

文明のレベルが高く、魔法が存在する世界だと管理局が在住している
ことが多いからだと思われる。

「……これぐらいしか分からんとはな」

チクショウ、時間がないから調べきれない

シグナムとフェイト・テストロッサが戦い仮面の男にフェイト・テスト
ロッサのリンカーズコアが薙々されたらしい

そのおかげでページ数は相当稼げた

この分だとはやての誕生日前には完成するかもしれない。

それを理解しているヴォルケンリッターはザフィーラ以外、全員が
出掛けている。

シグナムとヴィータは蒐々に、シャルははやての病院の付き添いに

「なあ、ザフィーラ」

俺はリビングのソファに座り天井を見上げながらザフィーラに話しかける

「なんだ？」

犬の姿のザフィーラは床に座り、テレビを見ている

「……俺達がやってることは本当に正しいのかな？」

「どうしたのだいきなり？」

「最近さ、色々とあつてよ……なにか今やってることは何かが間違えてるんじゃないのかな？」

「それは蒐集をしているのが間違いだと？」

「違う、うまく説明はできないけどもなにかが間違えてる気がするんだ」

そうなんだよ、なにかが俺の胸で引っかかっているんだ。

なにか俺は重大なことを見落としているんじゃないか？

思い過ごしならばいいけどもこういつ予感当たってしまうのが常だ。

「なんにも起こらなければ、それで良いんだけどな——」

頼むから、思い過ごしであってくれ。

第十七話（後書き）

次回更新はいつになるのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801q/>

ある意味チートな少年

2011年8月26日19時38分発行